
悠久交響詩篇ペルソナ

弥生雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久交響詩篇ペルソナ

【Nコード】

N0827U

【作者名】

弥生雨

【あらすじ】

夜翔族の少女セレネは、妹の病気を治す薬を求めて、交易の町エルラインを目指す。が、その途中の、瘴気が立ちこめる《死の森》で瘴気に当てられ、倒れてしまう。

と、その彼女を助ける何者かの姿があった。

道化の仮面で顔を隠したその男は、ペルソナと名乗った。

連作短編のファンタジー小説。全六話完結予定。

自サイトからの転載です。

第一話 『故郷〜Hometown〜』

悠久交響詩篇ペルソナ

第一話 『故郷〜Hometown〜』

ルクレツィア王国の東に、濃い瘴気の霧が立ちこめる森が広がっている。

辺りの人々はこの森を《死の森》と呼び、よほどのことがない限り、足を踏み入れることはない。

そんな《死の森》を今にも倒れそうになりながら進んでゆく、一人の少女の姿がある。

少女は厚手の大きなローブを纏っており、深くフードをかぶって顔を隠していた。

何を背負っているのだろうか、その背中はやや不自然に膨れあがっている。

すぐそばの木に手をついて、少女は息をついた。朦朧とした表情で、額を拭っている。

(はやく、この森を抜けないと)

分かつてはいるのだが、瘴気に侵され、体がいうことをきかないのである。

(行かないと)

木から手を離し、少女は一步踏み出した。

そして、どさりと倒れた。

「え？」

思わず声がもれる。手に、体に力が入らない。視界が白く染まり始めてゆく。

「あ、あ……」

それでも前に進もうとするが、腕が動かない。立ち上がることも

できない。

意識が遠のいてゆく。

(そんな、な……)

死ぬ？

最悪の考えが脳裏をよぎる。

そのとき、少女の耳に草を踏みしめる音が届いた。

弱々しく顔を上げる。少女の朦朧とした視界が、黒いものをとらえた。

(誰……?)

突然の浮遊感。抱き上げられたことが分かった。

どうしてだろうか。少女は、安堵を感じていた。

そして、少女の意識はぷつりと途絶えた。

ぱちぱちと、なにかが爆ぜる音だけが、はっきりと聞こえてきている。

少女は、重いまぶたを上げた。

まず目の前に広がったのが、木目の天井。

少し体を動かそうとすると、ぎし、という音が鳴った。

自分がベッドに寝かされていることを、少女は知った。

白く柔らかい毛布を、肩までかけられている。

ゆっくりと体を起こして、少女はあたりを見回した。

大木をくりぬいて作ったのだろうか、優しい木の香りが立ちこめる部屋だった。

簡素な窓の外に、瘴気の立ちこめる森が見える。

部屋の中には、暖炉と、ソファと、テーブルと、ベッド。

必要最低限の家具のみしかない、さっぱりとした内装である。

テーブルの上には湯気の立つ鍋と、皿と、銀のスプーンが一つ。

そしてソファの上に、黒い影。

誰だろう……。

後ろ姿からして、男の人かな、と少女は思った。
彼が、自分を助けてくれたのだろうか。

暖炉の火を見つめていた彼が、ふと顔を上げて、少女の方へ振り返った。

少女は、びくりと身を震わせた。彼が、仮面で顔を隠していたからだ。

『気がついたかい？』

声が、少女の頭に響いてきた。

「え……？」

少女が驚きの表情。

『ああ、驚かせてすまない』

彼は顔の仮面に触れて、呟いた。その呟きは、頭に直接聞こえてくる。

現に、男は仮面からのぞく口元を、一切動かしていなかった。

『これが、どうも外せなくてね。そして言葉も、何年も前に失ってしまった。でも、こうしてどうにか話すことはできる』

男は、口元をほころばせた。微笑んだようだ。

そしてソファから立ち上がり、少女の方へ近づいてきた。

『テレパシーというやつさ。私は、伝えるだけで知ることにはできないが。それよりも、体のほうは、大丈夫かい？』

「あ……、は、はい。大丈夫です」

少女は恐る恐る答えた。

「あの、あなたが助けてくださったんですか？」

『一応そういうことになるかな。この森は危険だ。あたりの人だつて、この森には近づかない。君はどうして、この森に？』

「この森を抜けた先の、エルラインに用がありました」

『エルライン？ ああ、《交易の町》エルラインか』

男は、顎に手を当てて、少し考えたようだ。

『エルラインなら、海路の方が安全じゃないか？ 飛行船で行く、という手もある。森を抜けるなんて、どうしてそんな危険なことを』

「ごめんなさい。でも、あまり目立てないんです、わたし」
言いながら、少女は厚手のローブをはだけさせた。
男がわずかに驚いたようだった。

ローブの下に服を着てはいたが、少女のその背中には、蝙蝠の飛翼のような、大きな翼が生えていたからだ。

『君は、夜翔族なのか』

『ご存知なんですか？』

『ああ、少しだけ』

「そうですか……。わたし、セレネと言います。ご覧のとおり、夜翔族です」

『夜翔族は、滅多に人前へ姿を表さないと聞いている。君は、どうして？』

「妹が病気にかかって、薬がいるんです。それはエルラインでしか手に入らないらしくて、だから、わたしが」

『ひとりで、町を出てきたのかい？ そして、ここまで』

セレネは、ゆっくりと頷いた。

「目立たないで行くには、森を抜けるしかないと思って。でも、ダメですね。あなたが助けてくれなかったら、わたし、今頃……」

瞳を閉じたセレネが、胸に手を当てて、深呼吸をした。

「ありがとうございます。えっと……」

『 ペルソナ。私は、ペルソナ・シルフィーユだ』

名乗っていないことに気がついたのか、遅れて男　ペルソナが、
呟くように告げた。

その唇は、どこか悲しそうに、そして寂しそうに歪んでいる。

気付かず、セレネは微笑んだ。

「ペルソナさん……、ペルソナさんは、どうして森の中に住んでいらっしゃるんですか？」

『さて、私にも分からない。というのも、私は記憶障害があるらしくてね。気がついたら、この家にひとりぼっちだった』

苦笑気味に、ペルソナが答えた。

『たまに、君のように森へ踏み込んだ魔族を助けたりすることがあったけれど、それでも数年に一人、とかの割合さ。君は、五年ぶりにくらいの客人になるかな』

セレネは静かに、ペルソナの言葉を聴いていた。

この瘴気が立ちこめる森で平然と暮らしていられるということは、ペルソナ自身、かなり上位の魔族なのだろうか……セレネは、心の中で思っている。

それにしても、セレネの中には、妙な安堵感があった。

懐かしさを感じさせる気配を、ペルソナは持っているようだ。

初対面のはずなのに、昔　どこかで会ったことがあるような、優しい雰囲気。

これは、そう、

(まるで、《あの人》のような)

でも、そんなはずはない、とセレネは小さく首を振った。

あの人は、もう百年も前に、この世を去っている。

《勇者》と呼ばれた、四人の人間たちの手によって。

『さて……、妹さんの薬、急がなければならぬね。君が大丈夫なら、そろそろ出発しようか』

え、とセレネは目を丸くする。

『私もついて行こう。この森の抜け方は知っているし、一人だけでエルラインに行かせるには、君は少々危なっかしいからね』

セレネを見つめ、口に微笑みを浮かべるペルソナ。そして思い出したように、

『おっと、忘れてた』

テーブルの方へ歩いて行く。

湯気の立つ鍋から、お玉で何かをすくい取り、皿へと移す。

皿にスプーンを添えて、ペルソナはセレネのところへ戻ってくる。そして、そっと皿とスプーンを差し出した。皿の中には、青く綺麗な色をしたスープ。

『薬草から作った特製スープだよ。これを飲めば、外の瘴気も怖く

ない。味も悪くないしね』

ありがとうございます、とセレネはそれを受け取った。スプーンでスープをひとすくい。湯気の立つスープは温かく、そして良い香りだった。

すくったスープを、セレネは口に運ぶ。

透き通った空を思わせる、不思議な味がした。

スープの効果は絶大だった。

体の自由を奪う瘴気も、今はまるで苦痛に感じない。

ペルソナに手を引かれながら、セレネは森を進んでゆく。

しばらく行くと、薄暗い森の中へ、だんだんと赤い光が差し込んでくるようになった。

出口が近いようだ。

『もう少しだよ』

ペルソナが囁くように言った。

まもなく森を抜けたとき、セレネの目の前には、大きな町と、夕焼け色に染まった海。

「わあ……」

その美しい光景に、思わずため息をもらしてしまう。

『あれが、エルラインだ』

「大きいんですね」

『交易船が絶えず行き交う、豊かな町だからね。あの町で、そろわないものはないよ』

二人は、しばらく夕焼け色に染まる海を臨んでいた。

『さあ、行こうか』

セレネとペルソナは、エルラインへ向かった。

日も落ちかけている時間だというのに、エルラインの商店街は、

買い物客で賑わっていた。

セレネは、ペルソナと離れないようにしっかりと腕を組んでいる。行き交う人々が、時折二人へ好奇の視線を送ってきていた。

黒い襟立てマントを羽織り、腰にサーベルを下げた仮面の男と、厚手のローブを纏い、フードを深くかぶった女。さぞかし、奇妙な組み合わせに見えることだろう……セレネは少し恥ずかしくなり、頬を赤らめている。

また、ペルソナと腕を組んでいることも、恥ずかしさに拍車をかけていた。

「あ、あの、ペルソナさん？」

足を止めずに小声で声をかけると、『ん？』とペルソナがセレネを見た。

「わたしたち、目立ってませんか？」

『そんなことはないさ。この町はいろんな物資が行き交うけれど、いろんな人々も行き交う。普段、滅多に見られないような人種だったりね。彼らは、「また珍しそうなのが来た」ぐらいにしか考えていないだろう。だから気にすることはないよ』

「それに、わたしたち、その……」

『もしかしたら、そう見えているかもしれないね』

どこかいたずらっぽく、ペルソナが微笑。

(ペルソナさんのいじわる……)

気持ちを読まれてしまったセレネは、恥ずかしそうに顔をうつむかせた。

恋人同士に見えたりしてるんじゃないですか　そう言おうとしたのだ。

『……ここみたいだ』

足を止めて、ペルソナは言った。

セレネは顔を上げて、ペルソナの示した方を見る。

薬屋の看板が、大きく掲げられた店があった。

『さ、早く買い物を買わせてしまおう』

「あ、はい」

二人は店へ入っていった。

セレネが必要としている薬は、あった。

少し高かったが、持ってきていたお金でなんとか買うことができた。

まもなく、二人は店を後にした。

外は夕闇に包まれはじめている。

「すっかり遅くなってしまいましたね」

『ああ。また森を抜けるにしろ、夜の森は危ない。今日は、ここに一泊したほうが良いかもしれないね。宿屋を探そうか』

「あの、ペルソナさん。わたし、その……」

セレネは口ごもる。

薬を買うのにお金を全部使ってしまい、宿泊料を持ち合わせていなかったのだ。

『気にしなくていい。宿泊料は私が持つよ』

「でも、そんな、悪いです。なんだか甘えっぱなしみたいで」

『君を助けたのも、何かの縁さ。もう少し甘えたって、バチは当たらないよ』

ペルソナの口元へ、優しい笑みが浮かんでいる。

そういわれては、断る義理はない。

二人は宿屋を探した。さすがはエルライン、大きい町だけに、宿屋も多いようだった。

しかし、どこも満室だと断られた。

ここがダメなら　と決めて、入った宿屋で、なんとか部屋を取ることができた。

一室だけ空いていたらしい。

部屋を取るとき、宿屋の女将はからからと笑い、

「まあ、あんたら好きあった仲なんだから、一室だけで問題ないでしょっ。」

などと勝手なことを言って、セレネを真っ赤にさせた。

部屋に案内される。さざ波の音が心地よい、海に面した部屋だった。

セレネはベッドに腰掛けて、夜の海を眺める。

「海って、綺麗ですね」

呟くと、ソファに腰掛けていたペルソナが立ち上がり、窓際まで歩いてきた。

「海を見るのは、初めてかい？」

「いえ……、ずっと昔に、一度だけ見たことがあります。でも、それっきりで」

押ししては引いてゆく、穏やかな波音。セレネはそっと目を閉じて、語る。

「わたしの故郷は、山に囲まれた場所にあるんです。誰にも見つからずに、夜翔族がひっそりと暮らせるように」

夜翔族は、魔族の中でもあまり力を持たない種族だ。

魔王が勇者によって倒されてから、百年。魔族は、人を襲うもの、そして人から隠れるものの二つに分かれた。夜翔族は、後者だった。

人間に捕まれば、見せ物にされたあげく殺されてしまうだろう。

それを避けるため、夜翔族は人目を避けた場所に集落をつくり、穏やかに暮らすようになった。

「山を越えることは禁じられていますから、海を見ることは叶いません。こういうことがないかぎり」

目を開き、夜の海を、セレネはいとおしそうに見つめる。

「今でも、初めて海をみたときのこと、覚えてる……。なんて広いんだろう、なんて綺麗なんだろうって。そして、それから幾年も経って、こうして改めて見ると、そのときの気持ち、まるで昨日のことみたいに蘇ってくるんです。あの頃の気持ち、あの頃のこと」

再び目を閉じて、セレネは昔を思い出す。

まだ小さかった頃のこと。そのときは、まだ、人間と魔族が共存していた。

今はもういない、魔王様のことを考える。

人間と魔族の子供をあつめて、よく遊んでくれたっけ……。魔王様はとても優しくかった。いけないことをすると、本気で叱ってくれた。悲しいことがあって泣いていたら、一緒に悲しんでくれた。楽しいことは、分かち合ってくれた。

いつも笑っていた、魔王様。

いなくなってしまうても、その頃の記憶は色あせていない。

魔王様のことを思い出すと、胸がいつぱいになる。

セレネは、いつしか泣いていた。そして悲しそうに笑っていた。

『素敵な思い出なんだね』

「……、ええ」

涙で声を詰まらせながら、答える。

ペルソナは、むせび泣くセレネをしばらく見つめてから、外の海へと顔を向けた。

『過去を思い出して、泣くことができる。それは、とても素敵なことだと思っ』

セレネは、涙でにじんだ目で、ペルソナを見た。

『私もね、こうして海を、そして君を見ていると、懐かしい気持ちになるんだ。いつか私は、こうして夜の海を見ていたことがあって、君のことも、ずっと昔から知っているみたいに思えて、仕方がない。だから君のことを放っておけなかったのかな』

ペルソナもまた、悲しそうに微笑んでいた。

『それが嬉しくて、ひどく、もどかしい……』

そう語るペルソナに、セレネは、魔王の面影を見ていた。

(やっぱり、ペルソナさんは、魔王様に似ている)

そう、その優しさが、まるで生き写しのように。

(でも……)

そんなはずがないことは、セレネが一番分かっていた。

魔王は、死んでしまった。殺されてしまったのだから。

でなければ、人と魔族が、争いあつたりするはずがない。

ふいに、目元を拭われて、セレネは我に返った。

ペルソナが、優しく涙を拭き取ったのだった。

『泣くのは、これくらいにしようか。今は、君の妹さんに薬を届けることを考えないとね。涙を流すのは、妹さんの病気が治ってからでも、遅くはないだろう？』

ペルソナの言葉に、セレネは勇気づけられるのを感じた。

「……、はい」

だから、咲き誇るような笑顔で、頷いた。

翌日、早い時間に起床した二人は、朝食をすませて宿屋を出た。

昇ったばかりの太陽がまぶしく、海がきらきらと輝いている。

セレネは深呼吸をして、潮風を満喫する。

「良い朝ですね」

『そうだね。すごく天気も良い。旅立つにはうってつけの日だ』

ペルソナの方を、セレネは向いた。

「あの、ペルソナさんは、これからどうされるんですか？」

『特に何かをする、ということはないかな。森の案内くらいか……』

「もし……、もし、よろしければ、わたしと一緒に、故郷に來ませんか？」

『いいのかい？ だって君たちの町は……』

「ペルソナさんなら、大丈夫です。秘密、守ってくれるでしょうし。それに、なぜだかペルソナさんには、見ていただきたくて」

それじゃあ、お言葉に甘えようかな ペルソナは微笑んだ。

『実を言うとな、私もそうしたいと思っていただけし、あの森に戻ったところで、時間をもてあますだけだし、戻るのには、君を故郷まで送り届けてからでもいいかな、ってね』

セレネはうれしさで、胸がいつぱいになるのを感じた。

「良かった。断られたら、どうしようって思っていました」

『断るはずがないよ。良いところなんだろうね。今から楽しみだ』
笑いあいながら、二人はエルラインを発った。

一日かけて死の森を抜け、その向こう側へ。

二日、三日と進んだところで、セレネが言った。

「もうすぐですよ」

奥深い山を進む。これを越えたところに、セレネの故郷があるという。

まもなく、山を登りきる。セレネは少し駆け足になった。

「ほら、ペルソナさん、あれが」

頂上でそう言いかけて、セレネが凍り付いた。

「……………え？」

顔を真っ青にして、うめくように呟く。

遅れて頂上へついたペルソナも、その向こうの光景をみて、思わず口を引き結ぶ。

山をおりたあたりにある小さな町、そこから、火の手が上がっていたのだ。

「急ごう！」

ペルソナの鋭い声。セレネが震えながら頷く。

二人は、走った。一気に山を駆け下りて、町へ。

町の、ありとあらゆる家から炎があがっている。

そして住人たちの骸が、そこらじゅうに横たわっていた。

「ひどい……………」

ペルソナが口元を険しく歪ませた。

「みんな……………、いったい何が……………」

呆然と呟き、セレネはあることを思い出す。

「リアナ！」

妹の名を叫んで、セレネは走り出した。

「セレネ！」

ペルソナの制止もきかず、セレネは自宅へと急ぐ。

すぐさまたどり着き　そして、彼女は、愕然とした。

自分の家が燃えていた。そして、家の前に父と母、そして妹が倒れ伏していたのだ。

「お父さん、お母さん……」

信じたくない そんな様子で、セレネは、家族たちへ近寄ってゆく。

「リアナ……」

震える手で、そつと妹を抱き起こす。

暖かいはずのその小さな体は、すでに冷たくなっていた。

「嘘でしょ。ね、リアナ」

寝てるだけでしよう、リアナ。ねえ、起きて。

囁くように、願うように語りかける。返事は、なかった。

「嘘だ……。こんなの、嘘だよ」

悪い夢を見ているんだ そう思えたら、どんなに楽だったろう。けれど、妹の冷たくなった体が、夢ではないということをし、セレネに告げていた。

「なんで、どうして……！」

妹の胸へ顔をうずめ、むせび泣くセレネ。

追いついたペルソナが、悲しげにその姿を見つめている。

「なんだ、まだ生き残りがいやがったのか」

その声に、ペルソナが振り向き、セレネも顔をあげて、そちらを見た。

人間の男たちが八人、下卑た笑いを口に、そろそろと集まっていた。

手にした剣や斧が、血にぬれている。

「しかも若い女か。ちょうどいいや。他のはみんなぶつ殺しちまつたしな」

「夜翔族、最後の生き残り！ ってな。高く売れるぜ」

下品に笑いたてる男たち。

『……盗賊か』

ペルソナが、呟く。

「盗賊？ 人聞きの悪いこと言ってもらっちゃこまるなあ、兄さん
「よう」

「おおよ。俺たちや《勇者》だぜ？ 《勇者》！ なんつったつてよ、魔族をぶつ殺してやったんだからな！」

セレネが、妹をそつと横たえて、立ち上がった。

「あなたたちが、みんなを」

憎悪のまなざしを、男たちに向ける。

「そう親の仇みたいに睨むなよ。ああ、そっぴや親の仇か！」

笑えない冗談に、男たちがげらげら笑う。

「よくも！」

男たちへ、飛びかかっていこうとしたセレネを、ペルソナが制止する。

「仮面の兄ちゃん、あんたは要らねえ。死んでもらうぜ」

武器を回しながら、男たちが広がってゆく。

ペルソナは、それをゆっくりと見回した。

「死になっ！」

一斉にかかってくる男たち。

ペルソナはサーベルを抜き打ち、手近な一人の剣を弾き飛ばした。返した刃で、男の腕、足と切り払い、あっというまに動けなくさせる。

続けざま、振り落としてきた斧の一撃をひらりと躲し、斧男の足を切りつける。

前へのめり倒れようとした斧男の顔面に、ペルソナの膝蹴りが入った。

鼻血を吹いて倒れた男を尻目に、ペルソナはさらに敵を迎え撃つ。ほぼ同時に躍りかかってきた二人の足下を一気に薙ぎ払って倒し、真横から斬りかかってきた男の剣を、サーベルで受け止めた。

一団の頭目らしき男とペルソナの、鏝迫り合いが続く。

そのとき、背後から絹を裂くような悲鳴、思わずペルソナがそちらを見る。

セレネが、盗賊の一人に捕まっていたのだ。

『セレネ……っ！』

腹に、男の蹴りが炸裂。ふっとんだペルソナが背中から地面に着地する。

起き上がろうとするも、男の足がそれを妨げた。

サーベルは先ほどの一撃で取り落としており、反撃ができないペルソナ。もがいてみせるが、さらに足に力を込められ、起きることができない。

「おとなしくしてるや、兄ちゃん」

嘲笑を交え、男が言った。

セレネの悲痛な叫びが飛ぶ。

自分を捕まえた男の手からどうにか逃れようとするが、力がかたうはずもない。

きつ、とセレネは、男をにらみつけた。男が、わざとらしく笑う。「睨むなよ、嬢ちゃん。美人が台無しだぜ」

「そうさ、俺たちだって辛い。魔族とはいえ、殺すってなると心が痛む」

まったくそうは思っていない口調で言い、ペルソナを踏みつけている男が笑った。

「でもな、正義のために、俺たち人間は、魔族を殺さなきゃならぬ。残酷な話だがね」

残った男たちが、賛同の笑い。

「この嬢ちゃん、見せ物小屋にうっぱらうちまうんだろ？」

セレネを掴む男が、頭目へ訊ねる。

「ああ。高く売れるぜ。その金で、俺らは心の傷を癒す、ってな。いい話だぜ」

「じゃあ、じゃあよ、その前にいただいちまってもかまわねえよな？」

嫌悪を催す笑い声を聴きながら、セレネは唇をかみしめ、泣いていた。

悔しい。何もできない自分が悔しい。大切なみんなを殺されてしまったのに、仇討ちすることもできない、無力な自分が悔しくて、

仕方がなかった。

こんな奴らに辱められて、売り飛ばされて、見せ物にされてそんなことをされるくらいなら、今ここで死んでしまった方がマシだ。

涙を流すセレネの頬を、男の手が掴む。

「悪く思つなよ、嬢ちゃん」

舌なめずりをする、男のその手に、セレネは思いつきりかみついた。

情けない悲鳴が上がった。続けざま、渾身の肘打ちを男の腹にたたき込む。

思わず、男がセレネを離れた。

セレネは、走ろうとしたが、背中に男の蹴りを受けて、地面に倒れ込んだ。

「このアマ！ よくも！」

血走った目で、セレネをにらみ据える。

「ぶっ殺してやる！」

男が、斧を振り上げた。

セレネはそのとき、己の死を覚悟した。

刹那、

それを見ていたペルソナから、その場の空気を一変させるほどの殺気が吹き上がった。

と同時に、ペルソナを踏みつけていた頭目が、唐突な悲鳴とともに吹っ飛んだ。まるで、何かの強烈な体当たりを受けたように。

ペルソナがすぐさま立ち上がる。

そしてセレネを殺そうとしている男へ、手のひらを向けた。

そのときセレネは、己を吹き抜けてゆく何かを感じた。

？それ？は、不可視の力となって斧男に真正面からぶち当たる。

息を詰まらせるような音、そして骨が叩き折られたような音を伴って、斧男が吹き飛び、倒れて、動かなくなった。

何が起こったのか、セレネは、理解できなかった。

振り向くと、丸腰のペルソナへ、残っていた盗賊の二人がわめきながら飛びかかってゆくとこらだった。

「ペルソナさんっ！」

セレネの叫びを聞きながら、ペルソナは二人へ向き直っていた。と、遠くへ弾き飛ばされていたペルソナのサーベルが、何かに操られるように持ち主の手元へ、瞬時に戻って来た。

サーベルを掴み、声も出させずに、ペルソナは二人を斬り倒した。あっというまのできことだった。

ゆっくりとサーベルを納め、ペルソナがセレネに向き直る。

そこで、吹っ飛ばされていた頭目が、起き上がろうとして、呻いた。手と足の骨がばらばらになっていて、それができなかつたのだ。セレネは立ち上がるや、そばに落ちていた剣を掴み、頭目へと切っ先を向けた。

彼女の目には、果てしない憎悪の色。

「よくも、みんなを……」

ひいい、と頭目が悲鳴を上げる。

「殺してやる！」

セレネが頭目を殺そうとして放った突きが、頭目を殺すことはなかった。

ペルソナが、セレネの腕を掴んで止めていたからだ。

切っ先は、頭目のすぐのど元までできていた。頭目は泡を吹いて、気を失っていた。

「どうして……！」

憎しみ、とまどい、そして咎めを宿した目で、セレネはペルソナを見た。

ペルソナの口元が、悲しげに歪んでいる。

『殺してはいけない』

「でも、こいつはリアナを、みんなを！」

『それでも、殺してはだめだ。殺せば、君も彼らと同じになってしまう』

ペルソナは、限りなく優しく語りかけている。

『死んで償わせるんじゃない。生きて、償わせるんだ。彼らは、もう悪事を働くことはできない。そして代償を背負って、苦しみがら生き続けるんだ……』

告げて、ペルソナは回りを見渡した。あの烈しい戦いであっても、ペルソナは誰一人として殺してはいなかった。

だが、腕や、足の筋を切ったり、骨を砕いたりはしている。

盗賊たちは、もう悪事をできない体となっていた。そして死ぬまで、その体とつきあっていかなければならない。

『それで、十分だと思わないかい？』

過剰な憎しみは、何も生まない　ペルソナは、そう言っていた。セレネは、一步、二歩、下がってから、力なく剣を取り落とした。大きな瞳に、涙が浮かんでいる。

ペルソナが、そととセレネに近づき、彼女を抱きしめた。

セレネは、泣いた。

ペルソナの胸の中で泣き叫んだ。

まるで、全ての憎悪を吹き払うように、泣いて泣いて泣き続けた。セレネの泣き声は、町中に悲しく響き渡っていった。

二人は、盗賊たちを縛り上げ、できるだけ人に見つかりそうな場所へと運んだ。

それから町へ戻り、夜翔族たちの墓を建て始めた。

日が沈み、また登り　それを三度ほど繰り返して、全ての亡骸を手厚く葬った。

四日目の朝、二人は、とある墓を前にしていた。

セレネの家族が眠る墓　それを、セレネは見つめている。

ややあつて、背後のペルソナへ、

「ペルソナさん……、ペルソナさんは、これから、どうされるんですか……？」

ペルソナは、しばらくの沈黙のあと、答えた。

『 私は、記憶を探そうと思う』

「記憶を？」

『 ああ。君が殺されそうになったとき、何かを掴んだ気がしたんだ。それが何なのか分からないけれど、それは、私の記憶に関係してるんじゃないか、って思ってたね……』

セレネは、そのときの事を思い出す。

あのとときペルソナは、手も触れずに男を吹き飛ばした。

あの力を使ったとき、ペルソナの中で、何かがあったのだろう。

「だったら」

ペルソナへ向き直り、セレネが懇願する。

「わたしも、連れて行ってください！ ご迷惑になるかもしれないのは、分かっています。でも、でも、わたし……」

言いつのろうとするセレネの口へ、ペルソナがそつと指をやった。

『 もちろんさ、セレネ。私こそ、一緒に来て欲しい』

セレネの手をとり、ペルソナは微笑んだ。

『 君の居場所がないのなら、私が君の居場所になる』

ペルソナの言葉に、セレネは涙をにじませながら、頷いた。

『 さあ、出発しようか』

「はい」

そういつて、二人はゆっくりと歩き出す。

セレネはふと振り返り、家族の眠る墓を見た。

「さよなら、みんな……」

寂しげな、しかしどこか吹っ切れたような表情で、セレネはかつての故郷へ別れをつげた。

『 故郷 h o m e t o

w n s 』 了

第二話 『子供〜Child〜』

第二話 『子供〜Child〜』

ペルソナとセレネは、草色の小さな丘を登っていた。

てっぺんまで来たところで、ペルソナが疲れた様子で苦笑いを浮かべる。

『はは、どうもまいったね。数十年ぶりの遠出は、なかなか堪えるみたいだ』

『いやですよ、ペルソナさん。そんなおじいさんみたいなこと言ってます』

『見た目よりも、体にはガタが来てるのかな。自分でもびっくりさ』
ペルソナの言葉に、やんわりと微笑むセレネだった。

セレネはそろそろ、百五十七歳になる。
それでも魔族では、まだまだ若輩の部類だ。

人間の年齢で言えば、十九歳ほどになるうか。

対してペルソナの見た目は、人間で言えば二十六か、七か、それくらいだ。

おそらく、二百歳はゆうに越えているだろうとセレネは思っている。

もしかしたら、三百歳はいつているかもしれない。そうだと仮定しても、それにしても外見がやけに若々しいが。

『少し休んでいきますか？』

『そうしてくれると、ありがたかな』

二人はその場にゆっくりと腰を下ろした。

日も傾きかけ、空を鮮やかな紅色に染め始めている。

彼らが夜翔族の町を発つてから、そろそろ六日が経とうとしている。

かなり遠くへきたもので、旅の疲れが出始める頃だ。

実を言うと、セレネも少しばかりくたびれていた。

ペルソナの記憶を探しあてのない旅へ繰り出した二人は、セレネの提案もあり、ひとまず勇者の町カデンツァへ行くことにした。

カデンツァまではかなり遠く、歩きでは二ヶ月ふたつきかかるか三ヶ月みつきかかるか、といったほどだ。

まだまだ先は長いのである。

「ちょっと、疲れましたね」

『そうだね。長いこと歩き続けたから』

微笑むペルソナに、セレネは少しだけ罪悪感を感じている。

馬車や飛行船、そういった移動手段もあることはあるが、あまり人目につかないようになると、それらは避けた方がいい。

魔族であり、しかも背に蝙蝠のような大きな翼をもつ夜翔族のセレネは、いくらローブで隠していると言っても、少しばかりは目立ってしまう。

「ごめんなさい。わたしのせいで」

『気にすることはないさ。良い運動になるよ。それに実のところ、自分で言うのもあれだけれど、私の方が人目を惹くからね。謝るのは私のほうだ』

すまない、とペルソナはセレネへ言った。道化の仮面に、黒い襟立てマント。大道芸人だって、こんな格好をすることはそうないだろう。

『……なにか、良い移動手段があればいいんだけどね』

肩を竦めながら、ペルソナが夕陽を仰ぐ。

ふとそのとき、セレネが遠くの方へ小さな町があるのを見つけた。

「ペルソナさん、あれ……」

『おお、町だね。これはありがたい。久しぶりに、腰を落ち着かせられる』

互いに手を貸しあって立ち上がり、二人は町の方へ足を運んだ。

二人は町の中を、ゆっくりと進んでいた。
夕飯前の良い香りが、辺りの家から漂っている。

談笑をする町人たちと、外を遊び回る、多くの子供。

「子供がたくさんいますね」

『そうだね。良い町だ、という証拠だろう』

微笑ましく子供たちを眺める。

と、その子供たちが、見慣れない板で遊んでいた。

板は足下の辺りで浮いており、子供たちはその板に乗って、地面の上を滑るように走っている。

はしゃいでいた一人の子供が、ペルソナの前にぼんと飛び出してきた。

『おっと』

ぶつかって来た子供を、そっと抱きとめるペルソナ。子供はびっくりしてから、やがて恐る恐るペルソナを伺うように、上目遣いで見た。

「ごめん、おじさん。ぶつかっちゃって」

『いいんだよ。怪我はないかい？』

「うん、大丈夫」

『そうか、良かった。ところで、面白いもので遊んでいるんだね。それはなんていうんだい？』

ペルソナが板を指さしながら訊ねる。子供は、自慢のおもちゃを見せびらかすように、元気よく答えた。

「これ？ これはエア・ボードってんだ」

『エア・ボード？』

「そうそう。なんかよくわかんないけど、浮いて、走るんだ！ 速いし、楽しいんだぜ！」

『なるほど。この辺りで売っているのかい？』

「うん！ この先にある、ジャックさんのおもちゃ屋で」

『そうか、ありがとう。今度は、前に気をつけるんだよ』

バイバイ、と子供は手を振って仲間たちの輪へ戻ってゆく。

『エア・ボードか。あれは子供用みたいだね。大人用があれば、良い移動手段になるかもしれない』

そう語るペルソナは、どこか嬉しそうだった。

まだ開いていることを期待して、二人はジャックのおもちゃ屋を
目指した。

おもちゃ屋は、すぐに見つかった。

幸いなことにまだ開いているようだった。

ペルソナが扉を開く。からんからんと乾いた鈴の音が響いた。

やや薄暗く、小さなランプが店の中をたよりなく照らしている。

店内には、セレネもペルソナも見ることがないようなおもちゃが所狭しと並んでいた。

「はいよ」

ややあつて、奥の方から年配の店主がのっそりと顔をだす。

「いらつしゃい。何かお探しのかい？」

『エア・ボードは、置いてるかな？』

「そりやもちろん。今、一番の人気だよ」

『もし大人用があつたら、二つ、欲しいんだけど』

「大人用？ あることにはあるが、あんたたち、旅のお人かい？」

あまり見かけない格好をしてるようだが

『まあ、そんなところだよ』

「そうか、そうか。二人旅かい。良いことだ。若いうちは、世界を見て回るに限る。実をいうと、俺も昔は旅をしていてね、色んな所を回ったよ。そのときは一人旅だったが……もう三十年、いや、四十年ほど前かねえ。懐かしくなるよ」

昔話を語り出しながら、店主はエア・ボードを棚の下から二つ取り出して、ペルソナとセレネへ渡して値段を告げた。

ペルソナが勘定を済ませ、それから一時間ほど、二人は店主の昔話に付き合わされた。

店じまいの時間になってようやく解放された二人は、宿屋を探しだして部屋をとった。

セレネはおもちゃ屋から、部屋で腰を落ち着けるまで、ずっと気になっている様子でエア・ボードを見ていたようだった。

『何か、気になることでもあったのかい？』

ふと、ペルソナが訊ねる。

「ええ、はい……。ちよつとだけ」

セレネはエア・ボードを手にする。見た目はなんの変哲もない、少し湾曲した板だ。

「これ、かすかになんですが、精霊の気配を感じるんです。風の精霊の」

『風の精霊。シルフ、かな。ふむ……。』

ペルソナもエア・ボードを上げしげと見つめる。

『確かに、不思議な力を感じるね。かすかに……。』

「子供たちがこれで遊んでるのを見て、思ったんです。これはもしかして、精霊の力を封じ込めているんじゃないかって。この、エア・ボードに込められた力が、周りの風の力に干渉して、浮いているのかも」

『なるほど……。しかし、人間にそんなことが可能なのかな。その、精霊の力を封じ込めるといふことが』

「技術さえ知ってしまえば、簡単なのかもかもしれませんね。魔族には、物の加工に優れた、ドワーフという種族がいますから。どこかで、その技術が流出したのか、あるいは、ドワーフが、人間に伝えたのか……」

『もし後者だとしたら、素敵な話だね。思わぬところで、人間と魔族は共存しているのかもしれない』

そう思えるからね、とペルソナは微笑んだ。

魔族が人前から姿を消している今現在、その憎しみ合いはまだ続いている。

現にセレネだって、多少の憎しみが、無いわけではない。

悲しい話だった。

技術はなんの隔たりもなく、こうしてお互いを繋げているというのに。

『……ところで、子供のみならず、大人用もあるということとは、これがとてもいいものだという証拠なんだろうね』

顔を伏せようとしたセレネは、ペルソナの言葉に顔を上げた。

ペルソナは口元に子供のような無邪気な笑みをたたえている。

『乗り心地は、どうなんだろう。楽しみだ。そうそう、明日は町でエア・ボードの大会もあるらしいね』

それはセレネも、おもちゃ屋の店主が話しているのを聞いていた。

「大会に出るつもりなんですか？ まだ乗ったこともないのに」

『こういうのは、勝ち負けよりも楽しむことが大事なんだ。試乗ついでに、思い切り遊んでみようと思ってるね』

嬉々として語るペルソナに、思わずセレネは微笑んだ。

（ペルソナさん、まるで、子供みたい）

そしてその姿が、彼女にはやはり魔王の姿と重なって見えた。

まるで魔王ルシファーその人であるかのように、ぴったりと……。

もうあの人はいない。それは分かっている。

（でも、もしも、今も生きていたら……）

この人がそうなのかもしれない。

いや、とセレネは頭を振って、その考えを振り切った。

できればそうあってほしい。

今でも魔王様が生きているとしたら、それ以上のことはない。魔

族、こと夜翔族のような力を持たない魔族にとって、ルシファーの存在が、どれほど心強いことか……。

かつての魔王のことをセレネはよく知っているだけに、その気持ちがとても強い。

（けれど、ペルソナさんは、魔王様じゃない……）

そう、生き写しのように似ていたとしても、きっと魔王その人ではないのだ。

魔王が、勇者達によって殺されたという事実は、曲げられない。自分の中でペルソナと魔王を重ねようとすればするほど、その事実を思い知らされ、悲しくなるだけだ。

(ごめんなさい、ペルソナさん……)

心の中で、セレネは謝った。

たとえ面影を感じるとしても、ペルソナはペルソナだ。

勝手に重ねて、勝手に悲しんでしまうなんて、失礼にもほどがある。

『どうかしたのかい？』

セレネの様子に気がついたのか、ペルソナが聞いてくる。セレネは顔を上げて、無理矢理、微笑みを作った。

「いえ、わたしも試乗がてらに、大会に出てみようかなって……」

『そうか、それはなによりだ。一緒に大会を楽しもう』

二人は明日の大会に備え、早めに床へつくことにした。

翌朝。外は雲一つない晴天。

ペルソナが、絶好の大会日和だねと嬉しそうにもらした。

エア・ボードを携えて宿を発ち、受付会場へ向かう。

まもなく、大会参加の受付を済ませ、始まるまでまだしばらく時間があるので、今のうちにエア・ボードになれておこうという話になった。

もちろん二人とも、エア・ボードに乗ったことはない。

まずどうやって浮かすのか、それすらも分からなかった。

とりあえず地面に置いてみると、ボードを中心にぶわつと風が舞い、ゆっくりとボードが浮き上がった。

ほう、とペルソナが感心した様子を見せる。

ペルソナと、そしてセレネも、足下に浮き上がったエア・ボードにおおそるおそる乗ってみた。

不思議な浮遊感があった。

(翼で空を飛んでるときとは、また違う感じ……)

そんな風にセレネは思った。

さて、乗ってみたはいいが、どうすれば前に進むのか、それも分からない。

『ふむ……。何か、前に進むための機構があるわけでもないし……。心のなかで念じてみればいいのかな?』

ペルソナが呟くように言うや、彼を乗せたエア・ボードがゆっくりと前へ進み始めた。

その様子を見ていたセレネも、進め、と心のなかで念じてみた。

すると、自分に乗せたエア・ボードが前へ進んだ。恐れのお持ちをそのまま動作に表したように、非常にゆっくりとした調子だった。進んだ。

セレネが密かに感動しているのをよそに、少しだけ慣れたのか、ペルソナはスピードを出しつつ辺りを旋回していた。

そして、もっとスピードを出そうとして、体勢を崩した。

「あつ……!!」

思わず声をもらしたセレネの前で、ペルソナは見事にひっくり返って尻餅をついた。エア・ボードが宙でぐるんと一回転し、地面に転がる。

セレネはエア・ボードを降りて、ペルソナに駆け寄った。

「だ、大丈夫ですか?」

ペルソナは腰をさすりながら、大丈夫、と言いつつ苦笑いを浮かべていた。

『セレネ、これは少し気をつけたほうがいい。調子に乗るところいう目に遭うみたいだ』

その言い方に、思わず、セレネは小さく吹きだしてしまった。つられたように、ペルソナも笑い始める。二人はそうして、しばらく笑い合った。

それから二人が、エア・ボードに慣れる練習を繰り返しているう

ちに、大会開始時間が近づいてきた。二人は練習をやめ、大会開始場所の位置へついた。

まだ乗りこなすというほどまではいつていないが、ちょっとスピードを出すくらいならば大丈夫、というくらいには、ペルソナもセレネもエア・ボードに慣れていた。

大会開始直前。周りには、多くの子供たちと、まるで子供のような目をした大人たち。そして、応援に力を入れる人々の姿があった。「それでは、第二十三回キルリアンエア・ボード大会を、開始いたします！」

始まりを告げる火花が、空高く弾けた。まず子供たちが、一斉に飛び出していった。続いて大人たちが発ち、ペルソナとセレネは、少し遅れた人たちとともに、エア・ボードを走らせた。

さすがに、これで遊び慣れている子供たちや大人たちは速かった。セレネはペルソナと共に徐々にスピードを上げながら、コースを走る。

町の景色があつというまに流れてゆく。そして、ここちよい風。何人かを追い抜きながら、二人はやつと、コースを一週する。

先頭組から一週遅れ、と言った案配である。既に二週目を終えた子供たちに、どんどん追い抜かれている。

と、不意に脇から飛び出してきた子供に、セレネは思わずびっくりして声を上げた。あつと思つたときには、既に体勢が崩れている。エア・ボードが反り上がり、セレネは大会前にペルソナがひっくり返つたように、宙へ投げ出された。頭の中が真っ白になる。

軽い衝撃と、風と、浮遊感。

我に返つたとき、セレネは、自分がペルソナの腕の中にあることを知つた。まるでお姫様のように、抱きかかえられている。

セレネが転びそうになつたのに気がついたペルソナが、とつさに旋回して彼女を抱きとめたのである。

『大丈夫かい？』

ペルソナが訊いてくる。セレネは、思わず顔を赤くしながら、こ

くこくと頷いた。ペルソナは口元に微笑みを浮かべ、

『良かった。さあ、少しだけ、巻き返そう』

楽しそうに言って、スピードを上げた。

追い抜き、追い抜かれを繰り返す。

子供たちと、大人たちと、応援している人々の笑顔。

不思議な気持ちになった。

周りのこの人たちは、自分とペルソナが魔族であることを、もちろん知らない。

ここの人たちも、そして、今もどこかに息づいている魔族たちも、誰一人として知らないすごい光景を、セレネは目の当たりにしていた。

こちらの正体を、向こうは知らないとはいえ、今、この瞬間、この場所で、魔族と人間は共存していたのだ。

今すぐは無理かもしれない。

けれども、いつかきつとわかりあえる日がくる。ペルソナの腕の中で、セレネはそう思った。

(あの頃と同じように)

胸の上で、ぎゅっと手を握る。自然と笑みがこぼれた。

誰がなんと言おうと、わたしたちは今、ここで共存している。それが嬉しくて嬉しくて、仕方がなかった。

まもなく、最後の一週を二人は終えた。

結果は後ろから数えたほうが早かった。順位は伴わなかったが、それ以上のものを、二人は手にしていた。

町中が表彰式で盛り上がるなか、セレネとペルソナは、密かに町を発った。

エア・ボードを走らせ、穏やかな丘陵を進んでゆく。

『いい町だったね』

となりを走るペルソナが、ぼつりともらす。

「そうですね」

セレネは嬉しそうに答えた。

キルリアン。人々の笑顔があふれている、素敵な町。

機会があつたなら、また、大会に参加しに来よう　そう思った。そのとき、ペルソナさんもまた一緒に来てくれるだろうか。

このまま旅を続けて、ペルソナさんが記憶を取り戻した時、わたしたちの関係はどうなってしまうのだろうか。彼は、わたしのそばに居続けてくれるだろうか……。

考えると、不安になってしまふ。そんなとき、故郷を発つ時に、彼が自分へかけてくれた言葉がふと、蘇ってくる。

『君の居場所がないのなら、私が君の居場所になる』

ペルソナは確かに、そう言ってくれた。

(わたしは、信じる。ペルソナさんの言葉を)

顔を上げて、前を見る。世界はどこまでも広がっている。

まだまだ先は長い。旅は始まったばかりだ。

不安になることもある。けれどもペルソナがそばにいてくれるから、きつと大丈夫。セレネは、いつしか笑顔になっていた。

高く昇った太陽だけが、二人を優しく見守っている。

『子供』Ch i

l d 』了

第三話『神剣』Sword』

第三話 『神剣』Sword』

雲行きの怪しい空の下、エア・ボードで先を急ぐ、二人の旅人の姿がある。

男と女だった。

女は、フード付きの分厚いローブで細めの身体をすっぽりと包んでいる。

男の方は、道化の仮面で顔を隠しており、真っ黒な襟立てマントを羽織っていた。

セレネ・マクマホーンとペルソナ・シルフィーユである。

二人がキルリアンを発つてから、一月半が経つ。

さすがにエア・ボードには慣れたようで、右へ左へ、巧みに操ってみせている。

彼らの目指している町、カデンツアまではあと少し。なんとか、雨の降り出す前にはたどり着いておきたいところだ。

少し前の方で、商人たちらしき一団が馬車を走らせている。

他にも、馬を駆る冒険者たちなども見受けられた。

皆、雨に降られるまえに、と大急ぎだ。

セレネたちは、彼らから少し離れながら、エア・ボードを加速させた。

雨にぬれるのはご免だし、雨が降るその前に、せめて一仕事は終わらせておきたいところだ。

旅人たちをあっという間に追い抜いて行って、二人はカデンツアにたどり着いた。

まだ、雨は降っていないかった。

勇者の町カデンツアは、王都ログナーツほどではないが、かなり大きい町である。交易の町エルラインと良い勝負かもしれない。

冒険者、商人、旅人、吟遊詩人、いろいろな人が町に溢れかえっている。

手のひらに乗るほど小さくさせたエア・ボードを道具袋へ仕舞い、まず、二人は大通りの方へ向かった。

念じることで、小さくすることができたのを知ったのはつい最近のことである。

そして、大通りの片隅に場所を取り、客寄せを始めた。

なんだなんだと、すぐさま客が集まってきた。

人目をひくペルソナが大きく腕を広げて一礼し、少し距離を置いて立っているセレネの方を向いて、腰のサーベルにゆっくりと手をかける。

セレネは、道具袋の中から林檎を一つ取り出して、高々と掲げた。林檎に種も仕掛けもないことを見せつけてから、ペルソナをまっすぐに見つめる。

ペルソナが頷く。準備はできている、という合図である。

一度、二度、小さく振りをつけてから、セレネは呼吸を合わせて、林檎をペルソナの方へぼんと放った。

サーベルを抜き放つ音。

次の瞬間、ペルソナは放られた林檎をサーベルの刃に乗せていた。林檎には、傷一つ入っていない。

おお、と声上がる。

林檎をぼんと浮き上がらせて、一閃。

すばやくサーベルを鞘へ納めつつ、林檎を掴み止めたペルソナが、それをセレネの方へそっと放り返す。

セレネは一回転しながら、取り出していた皿で林檎を受け止めた。そして、ペルソナの指を鳴らす音が響くや、皿の上で回っていた林檎が、ぱかっと開いて皿の上に広がった。林檎は均等に六分割されていた。

ペルソナが客たちへ向かい一礼してみせる。

歓声が上がリ、拍手が飛び交った。

見物客たちがペルソナのそばに置かれていた深めの皿に、次々と銅貨や、たまに銀貨を投げ入れてゆく。

さらに二つか三つほど見せ物を披露したところで、ぼつぼつと雨が降り始めたので、二人は客にお辞儀をして、その場を引き上げた。それから、少し静かな場所で雨宿りをしながら、二人は笑い合っていた。

「なかなか好評でしたね」

『そうだね。ありがたいことだ』

投げ銭の入った皿をあらためながら、ペルソナは言った。

キルリアンを発つてからというもの、旅のお金を工面するために、二人は立ち寄る町々で、こうして大道芸を見せてまわっているのだ。また、二人の人目を惹く姿をごまかすにも、大道芸人という隠れ蓑はちょうど良い。

大きい町だけに、先ほどの稼ぎは良かった。

こう雨が降られると今日はもう仕事はできないが、このぶんだと一晩宿を取るくらいはできそうだ。

『……雨が強くなってきたね。これは、少し止むのを待った方がいいな』

ペルソナが空を見上げ、呟くように言った。

二人は寄り添うようにして、雨が止むのを待った。

だが、しばらくしても、雨はまったく止む気配を見せない。セレネがため息をついたとき、

「あの……」

二人へ声をかけて来る者があった。

見ると、傘をさした若い男性が一人、そこへ立っている。

「さっきの、大道芸人さんですよね？」

人の良さそうな声で、男が訊いてくる。

「ええ、そうですか……」

「良かった。実は、探していたんですよ。この雨で大変でしょう。」

どうです、少し、私の家に寄っていただけませんか？ 是非、旅の

お話を聞かせてください」

言いながら、予備の傘をそつと差し出してきた。

セレネは、ペルソナと顔を見合わせた。

ややあつてから、ペルソナは、小さく頷いた。

信じてもいいかもしれない、という意である。

二人とも、どうせこの雨で立ち往生していたところだ。傘を貸してくれるのは、非常にありがたい。

素直に傘を借り、二人は先を歩く男の後を追った。

男の家は、かなり大きく、所々の装飾がなかなか凝っていた。

広い居間の暖炉の上に、一振りの、見事な剣が飾られている。

男とその妻は、快くセレネとペルソナを招き入れた。

ソファに並んで腰掛け、二人は出された暖かい紅茶で一息つく。

向かい側のソファで、同じように男が紅茶を口に行っている。

「突然、お招きしてすみません。申し遅れましたね。私はジェイク。

ジェイク・ローガンといいます。どうぞよろしく」

「こちらこそ、お招きいただきありがとうございます、ジェイクさん。わたしはセレネ。そしてこちらが、ペルソナさんです」

セレネもペルソナも、ジェイクへ丁寧に頭を下げた。ふとセレネは、ローガンという名前に聞き覚えがあるような気がした。

ジェイクは微笑みながら、

「いや、ここの生活が長いものでしてね……といつても、私は生まれた頃から、この町を出たことはありませんが。それで時々、旅の人を招いてお話を聞かせてもらったりしているんです」

だから、ぜひともお二人の旅のお話を聞かせてください、とジェイクは言った。

セレネは、自分たちの正体を隠しながら、エルラインやキルリアン、今までに立ち寄った町や、エア・ボードの話をゆっくりと聞かせた。

彼女の話をかみしめるように、ジェイクは時々頷きながら、話に耳を傾けている。

そしてとつぷりと日が暮れたころ、ふと、ジェイクが口を開いた。「ところで お二人は、魔族でいらっしやいますよね？」

不意な言葉に、セレネは背筋が凍りつくのを感じた。

思わず、がたつと立ち上がり、身構えようとしたセレネとペルソナを、なだめるようにジェイクが手で制す。

「待ってください。私は、なにもあなた方を取って食おうとしていないわけではありません。私も、妻も、魔族には理解がありますので、どうぞ、ご安心を……」

あくまで、穏やかに語るジェイク。

セレネとペルソナは、顔を見合わせ、小さく頷きあつてから、そろそろとソファに腰を戻した。

それを見届けてから、ジェイクは、やんわりとした口調で話し始める。

「お二人はこの町の創始者、アレクス・ローガンをご存じですか？ 私は、そのアレクスの孫でして……それで、魔族の気配には、人一倍敏感で。……ほら、あそこに飾ってあるあの剣、あれは、まえに祖父が使っていたものです」

ジェイクが、暖炉の上の剣を示す。

見事な彫刻が施してあるそれは、ちょっと見ただけでも、普通の剣とはまるで違う風格を持ち合わせている。

『見事な剣ですね』

呟くように、ペルソナが言う。となりのセレネは、その剣に、あまり良くない印象を感じていた。

確かに見事な剣だ。

けれど、どうしてか、嫌だという気持ちがかみ上げてくる。

「神剣カデンツァと言います。この町の名の、もとにもなった剣……」

びくり、とセレネは思わず震えてしまった。彼女の中で、つなが

るものがあつたからだ。唇を戦慄かせながら、セレネは呟く。

「勇者アレクスの剣……」

その呟きに、はっとペルソナが唇が動いた。

『勇者、アレクス……』

もちろん声は出なかったが、驚きの感情が、その唇から見て取れた。

「ええ……。かつて魔王を討伐した四人の勇者　その中心人物となっていたのが、祖父のアレクスです」

セレネの気持ちは察したのか、悲しげな声でジエイクは続ける。

「そしてあの神剣カデンツァが……」

その先を言われなくても、セレネには分かった。あの剣が何をしたのか。あの剣の持ち主が、一体どういうことをしたのか……。

「　魔王ルシファーを殺したとされる剣なのです」

歯を食いしばり、セレネはローブの裾をぎゅっと握りしめた。

大切な魔王様を殺した剣、そして魔王様を殺した人　その孫が、今、自分の目の前にいるのだ。

ふつふつと、憎悪がわき上がってくる。

それを必死に押し殺しながら、セレネは訊いた。

「どうして、わたしたちをこの家に招いたんですか？　その剣を見せて　わたしたちをどうしたいんです？　なにをさせたいんですか？」

思わずとげとげしい口調になってしまう。ジエイクは、悲しそうに顔を歪めた。

「一つ、あなたがたに頼みたいことがあつたのです。それは、魔族のあなたがたにしか頼むことができない。そして……人間を代表して、なんておこがましいことは言いませんが、一言、あなたがたに謝りたくて……」

「謝る……？　謝るってなんですか！」

耐えきれず、セレネがテーブルを力一杯叩いて立ち上がった。

ペルソナがなだめようとするのもきかずに、セレネはまくし立て

るように言っ。

「今更謝ったところで、わたしたちがそう簡単に赦すと思ってるんですか。あなたたちは、魔王様を殺したんですよ。わたしたちの一番大切な方を……。なのに、百年も経ったあとで、謝られたっけどうしようもない！」

「ええ、ええ……。それは、もう……。」

重々理解しております、と悲痛な面持ちでジエイクは頷く。

「何が理解しているんですか。あなたたちには、決して分からない。魔王様を殺された、わたしたちの気持ち……。」

魔王を殺されたこと。それは家族を殺されたことと同じくらい、セレネには悲しいことだった。だから、止まらなかった。

「今更、許してくれだなんて……。」

大粒の涙を、セレネはこぼしていた。

「赦さない……。わたしは、あなたたちを絶対に赦さない！」

悲しみに満ちた声で叫んで、セレネはジエイクの家を飛び出していった。慌てて追おうとするペルソナを、ジエイクが呼び止めた。

「聞いてください……。本当に、今更だということは、よく分かっています。赦してくださいだなんて、おこがましいことです。セレネさんが言っただように……。」

ジエイクは立ち上がり、暖炉の方へ歩いて行く。

「子供のころ、よく祖父が話していました。自分たちは、間違っただけを犯してしまったのではないかと。魔王を殺してしまったことを、ずっと、ずっと、悔やんでいたようにです。そして、また私たちの前に魔族が姿を現すことがあれば、謝って欲しいと……。」

神剣力デンツァを手に取り、その刀身にそっと指を這わせる。死んだ祖父のことを思い出するように。

そして、ジエイクは意を決したように振り向き、ペルソナへ、その神剣力デンツァを差し出した。

「これを持って行ってくれませんか。セレネさんには、辛いものですが、私たちが持っているよりも、あなた方に持っていていただきたい

たい。それが、一番良いと思うのです」

ジェイクはペルソナをまっすぐに見据えて、頷いた。

彼の意をくみ取ったのか　ペルソナは、その剣をゆっくりと受け取った。

「すぐに赦してもらえないものではないでしょう。ただ、私たちの気持ちを知っておいて欲しかった……。あなた方を招いたのも、そのためです。伝えられて良かった。彼女には本当に辛い思いをさせてしまいましたか……」

悲しさと悔しさを押し込めるような声で、ジェイクが言う。

「今は、私も祖父と同じ気持ちです。魔王を殺してしまったことは、間違っていたのではないかと……。セレネさんを見て、本当に、そう思いました。とても赦されることではないでしょう。やはり、魔族と人間は、相容れることができないのでしょうか……」

首を振り、顔を俯けるジェイクに、ペルソナの声が響いた。

『赦しは、まずお互いの気持ちと向き合い、歩み寄ることから始まる。これは、あなた方の歩み寄りの、その証しだ』

神剣カデンツアを示しながら、ペルソナは微笑んでいた。

『確かに、今すぐには、無理かもしれない。でも、その気持ちは、必ず届く。どれだけ時間がかかろうとも、必ず　相容れる日が来ると、私は信じている。あなた方も、そう信じてくれていれば、それだけで十分だ』

ありがとう。そう言い残して、ペルソナはセレネの後を追ひ、家を後にした。

ジェイクが、窓へ歩み寄り、まだ雨の降りしきる外を眺めた。窓に映ったその顔に、迷いの晴れたような、穏やかな微笑みが広がっていた。

ジェイクの家を飛び出したセレネは、走った。

走って走って走り続けた。

やがて息を切らし、そばにあった木に手をつき、へたり込むように膝をついた。

「う、うう……う……」

呻くような嗚咽がもれる。

どんだんわき上がってくる、後悔と自責の念。

あんなことを言ったところで、もうどうしようもないことは分かっていた。けれど、止まらなかった。

大切な魔王を殺した剣を、殺した勇者の孫を目の前にして、心の奥底から突き上がってきた怒りを、止めることができなかった。

それは彼女にとって、当然のことであり、そして悲しいことだった。

いつかキルリアンで、セレネは人間と魔族、その共存の可能性を、その目で見たのだ。

そして信じていた。わかり合える日が来ると。

そう思っていたのに、先ほどは、怒りを鎮めることができなかった。

たとえ、人間が魔族を赦す日が来たとしても、魔族の方が、人間を赦すことができるのか。その疑問が、拭えない。

現に、セレネはできなかった。赦せなかった。とても、赦すことができなかった。

いつまでも憎み合っているうちは、何も始まらない。分かっていたはずなのに、どうしても、この憎しみは消えない。

（わたしは、どうすればいいの……？）

拳を握りしめながら、セレネは己に問う。

しかし、問うたところで、分かるはずもない。この胸に巣くう憎しみを抑えきることもできないのに、他に一体、何ができるといいのか。

「魔王様……」

咽びながら、セレネは呟いた。

子供のころ、この頭をなでてくれた魔王の手の感触を、今でも覚えてる。思い出すだけで、胸がじんわりして、そして悲しくなってしまう。

あの手の感触を、もう二度と味わうことはできないから。胸の奥が押しつぶされるように痛く、苦しい。涙を止めることができない。

（魔王様……、魔王様……）

謝りたかった、とあの人は言った。

祖父、勇者アレクスが魔王を殺してしまったことを、悔いているようだった。

けれど もう、遅い。あまりにも遅すぎる。

（ひどい……。今更すぎるよ……）

今更謝られたって、どうしようもない。

そして、それを責めたところで、またどうしようもない。

心のどこかで、それは分かっていた。

だから、悔しかった。彼らに対して、そして自分に対しても。

猛烈な自己嫌悪が、セレネを苛んでいた。

様々な感情が胸の中で渦を巻き、どうすればいいのか、何をすればいいのか、まったくわからない。

セレネの嗚咽は、すぐに雨音にかき消されてしまう。

冷たい雨の降りしきる中、蹲るようにして、セレネは泣き続けた。

雨脚は、どんどん強くなってゆく。

まるで荒れ狂うセレネの心を表しているように。

不意に、じやり、という音が耳に届いた。

顔をあげ、振り向くと、ペルソナが佇んでいた。

「ペルソナさん……」

『セレネ……』

ペルソナの姿を見つけるや、セレネはぱっと立ち上がり、彼の胸に飛び込んだ。

「……もう、どうしたらいいのか、分かりません。今更、それを責

めたってどうしようもないのに、でも、どうしても赦すことができないんです……！」

しがみつくように抱きついて、セレネは悲しげに叫ぶ。

「魔王様の　あの人の顔が過ぎてしまって、胸の中が煮えたくぎってしまふんです。止めようとしても、止まらなかった。止められないんです」

胸に顔を埋め、泣きじゃくるセレネの頭に、ペルソナはそっと手をやった。

『セレネ、そんなに苦しんでまで、すぐに受け入れる必要はない。ないんだ』

いつか感じたことのある、優しい手のひらのぬくもり。魔王に頭を撫でられたときのことを思い出し、雨と涙に濡れた顔を上げるセレネ。

ペルソナは、彼女をまっすぐに見つめていた。

『すぐに受け入れなくてもいいんだ。……ただ、向き合うことを、忘れてはいけないよ。憎しみあっているというのは、互いにそっぽを向いた状態だ。そんな状態からは、何も生まれない。セレネ、今すぐに受け入れるなんて、私は言わない。でもね、向き合うことは、必要なんだ。向き合わなければ、なにも始まらないからね……』

受け入れなくていい。ただ、向き合おう。

繰り返しながら、ペルソナは言った。

勇者が、魔王を殺してしまったことを悔やんでいて、魔族に対し、ずっと、すまないと思っていた。

確かに、今更の謝罪なのかもしれない。

だからその謝罪を、今すぐに受け入れる必要は、どこにもない。ただ、向こうがそう思っていること　その事実とは、向き合わなければならぬ。そうしなければ、何も始まらない。ペルソナは、そう言ったのだ。

セレネは胸に渦巻く感情が、そっとほどけていくような、そんな気持ちになった。

『受け入れるのは、受け入れられる気持ちになったときで良い。そのときで、遅くはないはずだ。明日、世界が終わってしまうわけでもないんだからね。まだまだ時間はたっぷりある。特に、私たちにはね。そうだろうか？ セレネ……』

口元に浮かぶ、限りなく優しい笑み。じんわりと胸が熱くなってくる。

また、涙があふれた。セレネはペルソナの胸に再び顔を埋めて、小さな声で言った。

「ペルソナさん……、もう少し、このままでいさせてください……」

ペルソナは、包み込むようにセレネを抱きしめかえして、頷いた。

いつしか雨は止んでいた。

二人は、ジエイクの家を招待される前に雨宿りに使っていた場所に、並んで座っていた。雲は晴れ、夜空には星々が煌めいている。

「ペルソナさん、その剣は……？」

神剣カデンツァにふと気がつき、セレネは訊ねた。

『彼らから、預かったんだ。私たちに持っていてほしいらしい。彼らの、歩み寄りのその証しさ』

腰に提げていた神剣カデンツァを手にしながら、ペルソナが続ける。

『これを手にしていると、なんだか、不思議な気持ちになるよ。…セレネ、少し考えたんだ。私は、これをもとの持ち主のもとへ返そうと思っている』

「もとの、持ち主？ それって、ジエイクさんへ……？」

ペルソナは、首を横に振った。

『いや、これを使っていた本人のことさ』

「勇者アレクスですか？ でも、彼は……」

もう亡くなっているとジエイクは言っていた。それはペルソナも

知っているはずだ。

「だからね、勇者の墓へもって行くのさ。そこで、この剣を供養するんだ。そうすることで、なにかがつかめそうな気がするんだ。なにかが……」

神剣カデンツアをぐつと握りしめるペルソナ。その口元に、セレネは決意のような何かを感じ取った。

「でも、肝心の墓の場所が分からないね。外に張り出されている地図を見ただけで、この町には、それらしいものはないようだ」
「……そういえば、昔、本で読んだことがあります。確か、カデンツアから北へ行ったところに、墓場の町と呼ばれる町があって、有名な冒険者や貴族が、そこに埋葬されているみたいです。もしかしたら、勇者の墓もそこにあるのかもしれない」

「なるほど、墓場の町か……」

「行くんですか？」

「もちろんだよ。君は？」

「もちろん、どこまでもついていきます」

セレネは微笑んだ。

彼がそうしたいと望んでいるのなら、自分についていくだけだ。それがどんな結果になろうとも。

もしもわたしの居場所がないのなら、彼がわたしの居場所になる。決して独りにはしないと、ペルソナはそう約束してくれているのだから。

(わたしは、この人の行く末を見届けたい。この人の、すぐそばで……)

身勝手な話かも知れないが、彼も自分にそうして欲しいはずだと信じている。

「じゃあ、ペルソナさん。早速、出発しましょう」

立ち上がり、セレネは言った。

「大丈夫なのかい？」

「ええ。大丈夫です。それに、今はなんだか、ときどきしていると

「いつか、どうも、気持ちが落ち着かなくて。すぐに行動したい気分なんです」

『 そうか。それなら、早速、出発しよう』

ペルソナも、やんわりと微笑んだ。

月が空高く昇っている頃、二人は密かに、カデンツァを後にした。星が瞬き、月が優しく二人の行く先を照らしている。

北にある、墓場の町と呼ばれる場所を目指して、二人はエア・ボイドを走らせた。

『 神剣 } S W O R

』 了

第四話 『墓石〜Grave』

第四話 『墓石〜Grave』

西へ傾いた太陽が、赤々と燃えさかっている。

セレネとペルソナが、神剣力デンツアを携えて《勇者の町》を発ち、二日。

途中に立ち寄った小さな町で、二人は《墓場の町》があるという場所を町人に教えてもらっていた。

北へ、北へ、エア・ボードを走らせる。

季節が秋を迎えようとしているのか、風が少しずつ、冷たくなってきた。

やがて二人は、遠くに、町のようなものを見つけることができた。

「ペルソナさん、あれを……」

「ああ。あそこが墓場の町のようなだね」

遠くからではおぼろだったが、だんだん近づいていくことに、いくつもの墓が立ち並んでいるのが、ちゃんと見えてくる。

二人が実際に、そこへ足を踏み入れてみると、なるほど、《墓場の町》というだけのことにはあり、閑散とした気配が漂っていた。

「さすがに、お墓ばっかりが目立ちますね」

「そうだね。町、というよりもこれは……」

辺りを見回して、

「ただの墓地、という方が、近いかもしれない」

呟くように、ペルソナが言った。

墓場の町と呼ばれている割に、ここには町らしき建物は、ほとんど見受けられない。

年月を経てすっかり風化してしまった建物の廃墟が点々とあるばかりで、あとは、ずらりと幾つもの墓が並んでいるだけだった。

枯れた木に止まる鴉がもの寂しく鳴いている。

二人は、辺りを歩いて回った。時々、墓石に刻まれた名前を見ようとすると、長年雨風に晒されていたせいか、ほとんど読み取れなかった。

はたと足を止めて、人の姿がないか、探す。
と、すぐ近くの陰から、ばさばさばさつと何かが飛び去っていった。

その音に驚いて、セレネがペルソナへ抱きついた。
セレネを抱きとめながら、今飛び去っていった何かを、ペルソナは見ていたようだ。

『大丈夫。ただの蝙蝠だよ』

「そうですか……」

怖いものではなかったことに安堵してから、ふと、自分の状態に気付いたセレネが顔を赤くする。

「あ、ごめんなさい、わたし……」

ゆっくりと離れて、恥ずかしそうに顔をうつむかせる。

『気にしないでいいよ。実は私もびっくりしてしまっただからね』
ペルソナは笑っていた。

そのとき、じやり、という音がペルソナの後ろの方から聞こえてきた。

振り向くと、シャベルを担いだ老年の男性が、肩に鴉を乗せてぽつんと立っている。

「……あれま、お客さんですかね。こりゃ、珍しい」
しわがれた声で言った。

「いや、いや、珍しいこともあるものですな。ここ数年ほど、めつきり人の姿を見たことが、ありませんでしたからね」

セレネとペルソナは、老人　　ミリガの家に招待されていた。

古びた荒屋である。ベッドと、木製のテーブルと椅子。小さな暖

炉。褪せた食器棚。机。ランプ。そして帳簿のようなもの。家のなかには、それぐらいのものしかない。

ミリガは、紅茶を淹れる準備をしている。

「ミリガさんは、ここで何を？」

「なに、墓守をね。……もう、四十年になりますか」

「一人で、墓守を？」

「ええ。他のものは、四十年前にみんな出て行っちゃまって、それっきりですよ。ここはずらつと墓が並んでいるでしょう。しかも、墓は増えていくばかり。そんな墓ばかりのところでもともな生活ができるかって、わしを残して、皆、去っていきましたよ」

懐かしむような、しかし寂しそうな声色だった。

「いくら名のある冒険者や貴族の墓があるとはいえ、何しろ、こんな辺鄙な場所ですからね。そう訊ねてくる人もいない。わし一人で墓守は事足りるつてもですよ」

食器棚から取り出したティーカップへ、紅茶を注いでゆく。

「たった一人で、ここを……」

セレネは小さな窓から、墓の並ぶ外の景色を見た。

決して、空気が淀んでいるわけではないが、墓場特有の、しいんと静まりかえった気配が、ここには充ち満ちている。

不気味なほどの静寂に包まれた町中。

時折、鴉の鳴き声と蝙蝠の羽ばたく音だけが響く。

四十年。あまりにも長い時を、ミリガは一人、ここで過ごしてきたのだ。

「お一人で、さぞや大変でしたでしょうに」

そう言うと、ミリガは、

「確かに大変は大変ですが、誰かがやらないといけないことですか」

もともと、家族とは死別し、人づきあいも少なかったから、ちょうど良かったと、笑いながら言ったが、やはり声に寂しさがにじみ出ている。

無理もない。こんな場所に一人でずっといれば、人恋しくもなるはずだ。セレネはそう思った。

「ところで、お二方は、どうしてこんな辺鄙な場所へ？」

淹れた紅茶をペルソナとセレネへ差し出しながら、ミリガが訊く。「いえ、勇者にまつわるものを、ちよつとした伝手で手に入れましてね。それを供養しようと思ひまして、ここへ」

「ほう、勇者の……」

口の中で、何度も呟くようにしてから、

「勇者に縁あるものですか。ふむ。それを供養とな……。今時、殊勝なお人ですな」

『私たちがずっと持っていて、仕様がありませんからね。しかるべき者のもとへ返すのが、一番良いでしょう』

「なるほど、なるほど……」

ミリガはゆっくりとした動作で、紅茶を一口飲んだ。

「勇者の墓は、確かにここにありますよ。《聖女》ミア、《白騎士》リヒター、《劍聖》ヴァイス、そして《勇者》アレクス。皆、あそこに眠っておられます」

ミリガは、窓の外の丘を示した。

他のものとは明らかに違う装飾の施された墓が、四つばかり、巖かに並んでいる。

「彼らは百年前、魔王を倒したとしてその名を上げられました、墓に入ってしまったら、普通のひとさほど変わりはありません。参る人もそうおらず、墓石は、雨風にさらされて、だんだんと風化してゆくだけ。やがて時が経てば、その四人の勇者の話も、同じように人々の記憶から薄れてゆくことでしょう。……悲しい話です」

愁うように目を細めている。

「魔族は、むしろ人間よりも遙かに長寿だと聞いております。恐らく、魔王の話は、彼らの中で薄れていくことはありますまい。しかし人間は、やがて忘れてゆくでしょう。もう百年、二百年と時が経つうちに……」

紅茶をすすり、一呼吸をおく。

「魔王を倒したことが、果たして良かったのか悪かったのか、わたしには分かりませんが、しかし魔族にしてみれば、きつとやりきれないことでしょうな。魔王を失うということは、つまり人間にするとこの国の王を失うということと同じ。それが、良き王ならなおさらのこと。勝手に奪っておきながら、勝手に忘れ去ってしまうなど…」

身勝手な話です……。しわがれた声で、そう呟くのだった。

「そういえばお二人は、魔王が倒されることになった原因を、知っておりますか？」

セレネも、ペルソナも、首を左右に振った。

殺されたことしか、セレネは知らない。その原因の話など、耳にしたこともなかった。

「そうですね。いや、わしもずっと昔に、人づてに聞いただけなのでなんととも言えませんが、なんでも、魔王が人間の子供を殺してしまったことが、原因だとか」

「そんな！」

思わず、セレネは叫んで立ち上がってしまった。

「そんなはずは……」

驚き、不思議そうにしながらも、ミリガは続ける。

「真偽のほどは分かりませんが、どうも、そういう話らしいのです」

「そんな……」

小さく呟きながら、セレネは力なく椅子に座り込んだ。

あの魔王が、人を殺していたという。それも、人間の子供を。

全く信じられない話だった。

そんなはずはない。あんなに人間を好いていた魔王が、人間をその手にかけるなど、あるはずがない。

「しかし、わしはどうも腑に落ちないのですよ。というのも、魔王が生きていた百年ほど前まで、人間と魔族は共存していたというではないですか。だとすると、何故急にそういうことになってしまっ

たのか、皆目、見当が付きません。何者かの策略があつたのか、あるいは、よほどの訳があつたのか……今となつては、知るよしもありませんが」

ミリガは、ふう、とくたびれたため息をつく。

「人間と魔族とが共存していたのだから、魔王はさぞや、良い王だつたはず。考えれば考えるほど、謎は深まるばかりです。もっと他に、道はなかつたのか　つくづく、そう思います。いや、思ったところで、もうどうしようもないのですがね……」

苦笑をもらし、ミリガは頭を下げた。

「いや、長々と話してしまい、失礼しました。何しろ、久方ぶりに人と会つたものですから……」

『いえ……、こちらこそ、有意義な話を聞けました。ありがとうございます』

「そう言つていただけると、何よりです。　供養を、するんでしたね。先ほど言いましたとおり、勇者の墓はあそこにあります。わしはここにおりますので、何か用がありましたら、声をかけてください」

ペルソナとセレネはミリガに礼を言つて、家を後にした。

丘に登る。

先ほど見たとおり、四つの墓があつた。

墓石にはそれぞれの名前が刻まれている。字はだいぶ薄れていた。《アレクス・ローガン、ここに眠る》と刻まれた墓石の前に、二人は立つた。

(これが、魔王様を殺した人のお墓……)

胸に手をやって、セレネはそれを見た。

添えられている花は枯れてしまつており、墓石も、すっかり褪せてしまつている。

憎い仇ながら、どうしてか、セレネは哀れに感じていた。

ミリガの言葉が蘇る。

参る者もそうおらず、墓石の名も彼らの話も、あとは薄れてゆく

だけ……。

空しい、やりきれない話である。

ペルソナが神剣カデンツァを抜き、胸の前で祈るように構え、切っ先を天に向けた。

しばらく、沈黙が流れた。どうやら、本当に祈っているようだった。

セレネも黙ってそれを見守っている。

やがてペルソナは、その神剣カデンツァをアレクスの墓の前に突き立てた。

『いつか、わかり合える日がくるはずだ。いつか……』

ゆっくりと、柄から手を離れた。

そしてセレネの方を向いて、済んだよ、と告げた。

はい、と頷くセレネ。

「あの、ペルソナさん」

『うん……？』

「ミリガさんの話、本当なのでしょうか」

『話？』

「魔王様が、人間を殺していたという話です」

胸元をかたく握りしめる。

「わたし、とても信じられません。あの優しかった魔王様が、そんなことをするなんて。いえ、絶対に、そんなはずはありません！

だって、だって……」

あんなにも、人間を好いていたのに。

どこかで、何かが間違っただけで伝わっているとしか、セレネには思えなかった。

『セレネ、私は……』

見ると、ペルソナは唇をかみしめていた。

『本当のところは、どうなのか分からない。けれど、もしそうなのだとしたら、どんな理由があれ、それは赦されないことだと思っ』

「ペルソナさん……」

『何者かの策略があるとしても、よほどの訳があるとしても……、人を殺してしまったことが事実なら、それは、とても赦されないことだよ……』

ペルソナは悲しげに唇を歪めた。

何も言えず、ただ、セレネはペルソナを見つめた。

不意に、何かに気がついたように、ペルソナが顔を上げた。

『あれは……』

そう言っつて、丘を少し下った場所にあつた、小さな墓の方へ走つた。

セレネも追いかける。

その墓の前で、ペルソナは立ち止まった。

追いついたセレネが、かがみ込むようにして、墓石を見た。

墓石には、掠れた文字でこう記されている。

《シルフィーユ、ここに眠る》。

『シルフィーユ……？』

それは、ペルソナの下の名と同じ名だった。

『ペルソナさん、これは……』

訊ねようとして振り返つたとき、セレネはぎよつとなつた。

ペルソナが、まるで雷に打たれたように硬直し、ぽかんと口を開けていたからだ。

かすかに震えていた。

そして、そろそろと手を伸ばし、震えながら墓石を撫でた。

セレネは言葉を失っている。

『シルフィーユ……』

ぽつりと呟いた、次の瞬間、ペルソナは突然、胸を押さえて苦しみ始めた。

『ペルソナさん！？』

苦しみ、倒れそうになるペルソナを、セレネが慌てて抱きとめた。

ペルソナは胸を押さえたまま、歯を食いしばり、口元に苦悶を浮かべている。

「ペルソナさん！ 大丈夫ですか！？ しっかりしてください！ ペルソナさん！」

セレネの声も空しく、やがてペルソナの身体から、ぐったりと力が抜けた。

気を失ったのだ。

夕暮れの丘に、セレネの叫び声が響いた。

叫び声に気がつき、その場に駆けつけたミリガとともに、セレネはペルソナをミリガの家へ運び込み、ベッドへ寝かせた。

数時間が経つても、ペルソナは目を覚まさなかった。

ミリガが外へ出て墓掃除の仕事を進める傍ら、セレネはずっとペルソナに付いていた。

あのシルフィークという人物の墓を見たたん、ペルソナは苦しみだし、気を失った。

シルフィークなる人物と、ペルソナの過去とに、何か関係があったのだろうか。

苦しみだすほど忌むべき記憶があり、それが墓を見たことで、不意に蘇ったのか。そうでもない限り、ああまでなるとはとても思えない。

詳しいことは、ペルソナ自身に聞いてみなければ、分からないが……。

ペルソナの手を、そっと取る。

(ペルソナさん……)

柔らかく握りしめる。この人が何を見て、何を思いだしたのか、分からない。

記憶を取り戻したのか、どうか、それも分からない。

今はただ、目を覚ますのを待つことしかできないのだ。

もしも記憶を取り戻したのだとしたら、彼はこれから、どうする

のだろう。わたしはどうなってしまつのだろう。考えると、怖くなつた。

独りにはしない。

わたしの居場所になってくれる　そうペルソナは言ってくれて
いる。

けれど、もしも彼が、わたしのそばにはいられないと言ひ出しで
もしたら、もう、どうすることもできないのだ。

目を覚まして欲しい。けれど、怖い。

記憶を取り戻していて、もしも、独りになることになってしまつ
たらどうしよう。

考えれば考えるほど、怖くなる。

いつの間にか、手を握る力は、強くなつていた。

「ペルソナさん……、怖いよ。わたし、怖い……」

その恐れをごまかすように、ペルソナの手を、ぎゅっと握つた。
しばらくそうしていた。

どれくらい、時が経つただろう。

セレネは、いつの間にかベッドに突つ伏していた自分に、気がつ
いた。

眠りに落ちていたらしい。ゆっくりと身を起こす。

思わず、息が詰まつた。

「ペルソナ、さん……？」

ペルソナの姿は、そこにはなかった。

つい、眠りに落ちる前、彼は確かにここにいた。

手まで握っていたのだから、間違いはない。

けれど今はもう、そこに彼の姿はなかった。

心臓が、早鐘を打つた。

「ペルソナさん……」

家の中を見回す。ペルソナも、ミリガの姿もない。

知らず知らず、呼吸が加速していた。

「ペルソナさん！」

叫んだ。

けれど、あの頭に直接響いてくる、透き通った声は返ってこなかった。

ミリガの家を飛び出した。

そして、走った。

墓場の並ぶ町中を、走った。

ペルソナの姿を探した。

しんと、静まりかえっている。

セレネは額に手を当てて、冷や汗を拭った。

ペルソナさんが、消えた。

わたしを、置いていった？

そんな、そんなこと、あるはずがない。

確かに、約束してくれていたのに……。

丘の上を見た。

一つの墓の前に、剣が突き立っている。

丘へ登って、見渡した。

そして、丘を少し下った場所に、誰かが蹲っているのを見つけた。

《シルフィーク、ここに眠る》。

そう記された、小さな墓石の前である。

セレネは震える足で、ゆっくりと近づいてゆく。

やがてその誰かが、ペルソナであることを知った。

ペルソナは墓石を抱くように、それにしがみつき、震えていた。

嗚咽を漏らすように、震えていた。

(ペルソナさん……)

セレネは木陰に隠れて、その姿を見ていた。

初めて見る姿だった。

いつも落ち着きはらい、そう感情を露わにすることはない彼。

その彼が、激しく慟哭しているように、墓石にしがみついている。

泣いているのかもしれない。

そうなのだとしたら。

ぞくりと、怖気が背中を走った。
わたしの知らないペルソナさんが、あそこにいる。あそこに
走れば、ほんの少しの距離。

それがひどく遠くに感じられた。
怖い。

寒気が、ざわざわ走る。

置いて行かれる。置いて行かれてしまう。

わたしを独りにして、ペルソナさんが、どこかへ消えてしまう…
…。

そんな考えが、胸を過ぎった。

(嫌だ！ そんなの、嫌……！)

思ったとき、既にセレネは木陰を飛び出して、叫んでいた。

「ペルソナさん！」

叫ぶと、ペルソナはびくりと身を震わせて、振り向いた。

『セレネ……』

立ち上がり、そろそろと歩み寄ってくる。

セレネも走りよって、ペルソナに抱きついていていた。

戸惑いがちに抱き返されるのを感じながら、セレネは涙を流して
いた。

「ペルソナさん、いなくならないでください。わたし……」
強く、強くペルソナを抱きしめる。

「怖いんです。独りになるのが……。急に、ペルソナさんが、どこ
かへ行つてしまいそうな気がして……」

『……そんなことはない、そんなことはないよ、セレネ』
ペルソナが、囁くように言う。

『私こそ、怖いんだ。君のそばにいられなくなることが』
ペルソナもまた、震えているようだった。

『セレネ、もしも私が、決して赦されない罪を犯していたとしたら
……。君のそばにいる資格がないのだとしたら、そう考えると、私
は……』

「嫌、嫌です」

セレネは首を振った。

「たとえ何をしていようとも、どんな罪を犯していようとも、ペルソナさんは、ペルソナさんです。わたしの大好きな、ペルソナさんです」

声を滲ませながら、叫ぶ。

「お願いです。傍にいて……。独りにしないで……」

『独りにはしない。するものか。私も君が好きだ。決して独りにはしない。君の居場所がないのなら、私が君の居場所になる。私は、確かにそう言った』

セレネを強く抱き返しながら、ペルソナは言った。

頭に響いて来るその声に、哀しみと愛しみが宿っていた。

『独りになどしない。ずっと傍にいるよ、セレネ……。だから君も、ずっと私の傍にいてほしい。私と共に、歩んでほしい。頼む……』

「ええ、ペルソナさん。ずっと傍にいます。ずっと、ずっと……」
ペルソナの胸に頬を寄せ、セレネは何度も、何度も繰り返した。
何度も、何度も、ひたすらに繰り返した。

鼻の鳴き声が、ほう、ほうと響いている。

二人は、シルフィーユの墓の前にしている。

ペルソナの口元が、悲しげに歪んでいた。

「なにか、思い出しましたか……？」

おそろおそろ、セレネは訊いた。

ペルソナは力なく首を左右に振った。

果たしてそれが本当だったのか、はたまた嘘なのか、セレネには分からなかった。

ただ、話したくないのなら、これ以上は訊かないと決めた。

「……いきましよう、ペルソナさん」

袖を引き、声をかける。

『ああ』

短く、ペルソナは答えた。

ミリガに挨拶をしてから、二人は墓場の町を後にした。

さらに北へと、進路を定めた。

二人が町を離れてゆくのを、一匹の大きな蝙蝠が見ていた。

やがて、彼らの姿が見えなくなると、

「ようやくだ。ようやく、その時が来た」

蝙蝠の発した薄霧のような声が、低く響き渡った。

「さあ、来るが良い、我が下へ。いつでもそこで、貴様らを待つぞ

」

そう言い放つや、高く月の昇る夜空へと、飛び去って行ったのである。

これから待ち受けているものを、旅立った二人は、知るよしもない。

『墓石』

〔 Grave 〕 了

第五話 『親友〜Friend〜』

第五話 『親友〜Friend〜』

はらはらと、雪が降りしきっている。

いつの間にか、辺り一面、銀世界になっていた。

季節は秋の初めだが、どうやら二人は、年中雪の止まないウエルスノー地区へ、足を踏み入れてしまったらしい。

《墓場の町》を発ってからというもの、どこを目指すというわけでもなく、何かに導かれるように、セレネとペルソナは北へ、北へと向かっていた。

『ここまで来たら、行くところまで行ってしまつのも、悪くないかもしれないね』

そう言ったのはペルソナだった。

雪が舞い降りてくる中を、二人はゆるゆるとエア・ボードで進んでいる。

『大丈夫かい、セレネ。寒くはないかい？』

『少し寒いですね』

かすかに身を震わせて、セレネは言った。

厚手のローブを羽織っているとは言え、辺りはすっかり雪景色。

やはり、寒くないと言えは嘘になってしまう。

『次の町では、防寒具を買いそろえなければね。私もこの寒さは、骨身にしみるよ』

『早く町を見つけて、うんと暖まりたいですね』

とは言ったものの、どこまでも雪景色が広がるばかりで、町らしきものは、まったく見あたらない。

『今はともかく、この景色を楽しみつつ、進むしかなさそうだね』
そうですね、とセレネは微笑を返した。

二人はエア・ボードを駆る。

広大な雪原は、時が止まっているように、しんと静まりかえっている。

どこか神秘的なものを感じさせる、心地の良い静寂である。

そのためか、ペルソナが傍にいる幸せを、セレネはいつもより強く感じていた。

身体の芯がじわりと暖まるような幸福感が、身を包む。

こんな静かな場所に二人きり。そう考えると、頬がかあつと熱くなってしまう。

それに気がついたのか、どうしたんだい、とペルソナが訊いてきた。

「い、いえっ！ なんでもありませんよ」

慌てて首を振り、ごまかすように満面の笑みを浮かべるセレネ。

「ただ、綺麗だなあ、って思っていただけです」

『ああ……、確かにね。雪を見るなんて、何年ぶりかな……』
しみじみと言い、

『心奪われる景色、とはまさにこのことを言うんだらうね』

ペルソナは、柔らかく微笑んだ。

美しく煌めく雪原の上を、滑るように進んでゆく。

やがて、夜の闇が立ちこめてきた頃。

いつのまにか、大きな何かが行く先に聳えているのに、二人は気がついた。

霧や霞のようにつつすらとしていたかげが、近づくにつれて、姿形を現してゆく。

それは、年月を経てすっかり古ぼけた、巨大な城だった。

「ペルソナさん……」

エア・ボードを止め、セレネが、不安そうな声を出す。

ああ、とペルソナは短く答えた。唇が、険しく引き結ばれている。目の前に聳える古城。

気にする前までは、何も無いように感じていたはずなのに、ふと気がついたときには、さも当然のように、それがそこへ存在してい

た。

異様である。

「気味が悪いですね……」

二人は、おそろおそろ城へ近づいてゆく。

巨大な扉の前で、二人は立ち止まった。

すでに辺りは濃い闇に包まれている。

しんと降りる雪が、二人の体温を徐々に奪ってゆく。

ペルソナは、城を、扉を見上げて、変わらずに唇を引き締め
ていた。

「この城に見覚えが？」

寒さに凍えながら、セレネが訊く。

『いや……』

また、ペルソナは短く答えた。

『だが、あまり良い予感はないね』

それはセレネも同感だった。

背筋がぞくぞくするのは、決して寒さからくるものだけではない
だろう。

(まるで、何かがわたしたちを誘っているような……)

そんな気がするのである。

そうして二人が扉を見上げていると、不意に、ぎい……と軋
だ音を立てて、ゆっくりと扉が内側へ開き始めた。

それに驚いたセレネが、ペルソナへ抱きつくように飛び寄った。

ペルソナは彼女をかばいながら、腰のサーベルに手をかけている。

二人の前で、扉はゆっくり、ゆっくりと開いていき、やがて開き
きったとき、中から一人の侍女らしき女が、灯の点った燭台を持っ
て出てきたのだった。

「お待ちしておりました」

にい、と侍女が笑う。

燭台の火に照らされた侍女の顔は、女のセレネでも、思わず息を
のんでしまうほど、美しかった。

『待っていた……？』

まだ身構えたまま、ペルソナが訝しげに訊ね返す。

「ええ。主がお待ちです。どうぞ、中に入られてください。歓迎いたしますよ、ペルソナ様。そして、セレネ様」

まだ、侍女は笑っている。

「どうして、わたしたちの名前を……」

答えず、侍女はついてきてください、と呟き、きびすを返した。侍女の後ろ姿が少し遠ざかってから、ペルソナは構えを解いた。セレネはペルソナのマントを掴んだまま、じっと彼を見ている。ややあつて、

『……、行くう』

ペルソナは侍女の後を追って歩き始めた。セレネも後へ続いた。

長い階段を上りきり、二人は、大広間へ通された。

真っ赤な絨毯が敷き詰めてあり、並んでいる調度品は、見ただけで一級品とわかるものばかりだ。

暖炉も立派なもので、傍の大棚には、分厚い書物や、上等な酒の瓶が並んでいる。

壁には、見事な装飾の施された剣や斧などが飾ってあった。

城の主とやらは、きっと名のある貴族なのだろう。セレネは、ぼんやりと思った。

しかし、はじめ、城を見たときの不気味な印象はまだ消えていない。

妙にひんやりとした空気が、この部屋、この城には満ちている。

まるで、あの《墓場の町》のような、静まりかえった空気が。侍女は主を呼びに行くと言って、部屋を出て行ったきりだ。

「不気味ですね……」

セレネが、ぽつりと呟く。

『確かに、そうだね……』

答えながら、小さく頷くペルソナ。

そんな彼を見て、セレネは思っている。

(なんとなく、ペルソナさんの様子がおかしいような……)

具体的にどこがどう、とは言い切れないが、どうも、おかしい。

いつも穏やかな彼にしては珍しく、気が張っているというか、ぴりぴりしているような印象があった。

ペルソナの様子もおかしいが、あの侍女の様子もおかしかった。

病的に青白い肌。魂を吸い寄せられるかのような、儂い美貌。名乗ってもいないのに、何故か名前を知っていたこと……。

恐らく、ただの人間ではないだろう。

魔族だろうか。だとしたら、ここの主も、魔族である可能性は高い。

なんとも言えないこの悪寒は、そこから来ているものなのか……。考えていたとき、突然、がたん、とものすごい音が鳴った。

セレネが飛び上がりそうになりながらそちらへ顔を向けると、誰も触れていないはずの窓が、勝手に開け放たれていた。カーテンが風に靡き、雪が降り込んできている。

そして次の瞬間、その窓から何か黒いかげが、どつと押し寄せるようになだれ込んできた。

蝙蝠の大群である。

それが、羽音を盛大に響かせながら大広間の上を行き交い、突如軌道を変え、セレネの方へ一気に押し寄せた。

『危ない!』

叫び、ペルソナがセレネを抱き寄せ、かばった。

急降下した蝙蝠の群れは二人の鼻先をかすめていき、軌道を変え、また上ってゆく。

大広間の明かりがふっと消え失せた。

暗闇の中を、蝙蝠の羽ばたく音が激しく響いている。

それに、喉を鳴らすような低い笑い声も混じっていた。その、くつくつと煮立つような笑いは、やがて高笑いに変じた。何事かと、セレネはペルソナの腕の中で怯えていた。

二人の目の前で、宙に青い炎がともった。

幽鬼の揺らめきのような、青い炎だ。

輪を描くように、ぽつぽつともる。

その輪の真ん中へ、蝙蝠の群れが、わさわさと集まってゆく。蝙蝠たちは重なり合い、人の形をしたかげへと、姿を変えた。青い炎とともに、そのかげが、ゆっくりと降りてくる。

絨毯に足をつけ、黒いマントを翻して、かげは顔を上げた。

「あなたは……」

炎に照らし出されたその顔を見て、思わずセレネは叫んだ。

「ラウス公爵様！」

ラウス公爵と呼ばれた男は、くつくつと喉を鳴らした。

「ようこそ、我がフェルベラント城へ。客人よ、歓迎いたしますよ……」

気品のある立ち振る舞いで頭を下げる。

どうしてこの人が　とセレネは思っている。

魔族で、このラウス・ブランディッシュ公爵を知らぬものはいない。

夜翔族を含む、《闇の眷属》と呼ばれる種族たちの、頂点に君臨する吸血鬼族　その王とも言える人物が、他ならぬ彼なのだ。

そして、魔王ルシファアの、唯一の親友とされている。

ラウスは総毛立つような笑みを浮かべて、こう言った。

「　久しぶりだな」

ねっとり絡みつく、暗闇のような声だった。

「久しぶり……？」

セレネは訝しげに呟き返したが、すぐさまその言葉が、自分に向けて放たれたものではない、ということに気がついた。

ペルソナを見る。ペルソナは、唇を食いしばるようにしていた。

そつとセレネを離して、一步、二歩と前に出る。

また、ラウスは低く喉を鳴らした。

「よもや、このおれを忘れたとは、言うまいな」

ペルソナは、答えない。ぎりぎり唇を食いしばっているだけだ。

「ほう、その様子だと、やはり覚えているようだな」

覚えている？

その言葉に、セレネは違和感を持った。

ペルソナには記憶障害がある。仮に昔、二人は会ったことがあるのだとしても、そのことを、ペルソナは覚えていないはずだ。

セレネの心を読んだのか、あざけるように、ラウスが唇を歪める。

「セレネと言ったな……。お前まさか、信じていたのか。その男の妄言を」

「妄言……？」

「妄言でなければ、でまかせか」

『止める』

ペルソナの声が、響き渡った。今までにない、殺意の籠もった、冷たい声だった。

それに、ラウスは肩を竦めてみせる。

「言葉も、記憶も無くしたと、お前はその娘に言ったな」

「どうして、あなたがそれを」

セレネは、震える声で訊いた。

「どうして、か」

こつ、と一步を踏み出す。

「セレネよ、私は見ていたのだ。その男のことを、そつなる前からずつと」

こつ、とまた一步を踏み出す。

「そつなる前から？」

薄く嗤っただけで、ラウスは答えない。

青い炎が揺らめいている。

「言葉も、記憶も、無くした、か……。よくもまあ、そんな嘘をつ

けたものだ。なあ、ペルソナよ」

「嘘？　嘘って、どういうことですか。ペルソナさん……？」

セレネは、不安に駆られながら、ペルソナを見た。

『止めるんだ』

冷たい声で言う。

しかし、ラウスは止めない。

「その娘を傷つけまいと、そう思って嘘をついたのか。あるいは、贖罪のつもりか？　だがそれが何になる。それが、その娘を救ったか？　罪の意識は、晴れたか？　そうではあるまい。いつまで下らぬことを、続けているつもりだ」

『止める！』

「お前は！」

ラウスが、声を張り上げた。厳しい眼差しで、ペルソナを見据えている。

「いつまでその娘を苦しめるつもりだ。いつまで、己を偽っているつもりなのだ！」

「止めてくれ！」

激しく響き渡ったその声に、セレネはびくりとなった。

今の声は、頭に直接響いてきたのではない。

ペルソナのその口から、確かに発せられたものだった。

「ペルソナ、さん……？」

そろそろと、ペルソナはセレネを一瞥した。唇が、悲しそうに歪んでいた。

「……、ペルソナさん」

呻くように小さな声を出したセレネの瞳から、涙が一筋、こぼれ出ている。

すぐさま、ペルソナはラウスを見据えた。

ラウスは嘲笑を浮かべている。

「やはり、嘘ではないか。声を無くしたなど……。記憶も無くしたなどというのも、おおかた、嘘なのだろう？　白状したらどうだ、

ペルソナ」

「黙れ！」

腰のサーベルを抜き放ち、ペルソナはラウスへ躍りかかった。間髪を入れずに、ラウスも腰の剣を抜いた。

剣と剣を打ち合う、鋭い音が響いた。

「何故だ。何故なのだ！ おれは、お前が帰ってくるのを待っていたのだぞ。おれだけではない。皆が、今もお前を待っている。それでも、お前はまだ己を偽るのか！」

「偽るも何もない。私は、ペルソナだ。他の何者でもない。ペルソナなのだ！」

「まだそんな世迷い言を！」

剣を打ち合いながら、互いに、激しい言葉を浴びせかける。

「ならば……これでもまだ、そう言い続けられるか！」

ぼう、とラウスの左手に光がともった。

危険を察知して、ペルソナが退こうとする。

だが一歩遅い。

ペルソナの顔にかざされた光が、次の瞬間、音を立てて破裂した。セレネの悲鳴が上がった。

身体を仰け反らせ、ペルソナは仰向けに倒れていった。ぱらぱらと、何かの破片が後へ続く。

「ペルソナさん！」

すぐさま、セレネが駆け寄り、彼を抱き起こした。

「大丈夫ですか、ペルソナさ」

言いかけて、彼女は、思わず息を詰まらせた。

「そんな、まさか……」

「よく見るが良い、娘よ。それが、その男の正体だ」
ラウスの声が響く。

震える手で、セレネはペルソナの顔に触れた。知らずに、涙があふれていた。

「魔王様……！？」

喉で声を詰まらせるようにして、呟いた。

仮面が砕け散り、あらわになったペルソナの素顔　それは、まごうことなく、百年前に勇者によって葬られたとされる、魔王ルシファー、その人のものだった。

女と見紛うほど整った、凛々しい顔立ち。

全てが、あの頃とまるで変わっていない……。

ペルソナは、閉じていた目を、ゆっくりと開けた。

「セレネ……」

小さな声で呟く。聞き覚えのある、優しく美しい声。

不意に、弾かれたように身を起こし、ペルソナは仮面がはがれた自らの顔に触れ　茫然とした。

そしてセレネが見ていることに気づき、顔を隠すようにして俯いた。

「ペルソナさんが、魔王様だった……？」

手で、ペルソナは己の顔を隠している。

「どうして……」

「すまない」

悲しげな声で、ペルソナは　いや、ルシファーは言った。

「セレネ、すまない……」

セレネは、ルシファーへすがりつくように、寄っていた。

「お顔を、もっとよく見せて下さい」

言われて、そろそろと、ルシファーが顔を隠す手を外した。

「ああ……」

震える両手で、その美しい顔に触れる。そして、

「魔王様……。確かに、魔王様……!!」

ルシファーの首へ手を回し、抱きしめた。

「ああ、魔王様……」

「　セレネ、怒らないのかい……？」

「……怒りませんよ。怒るはずがありません」

頬を彼の胸へこすりつけるようにして、セレネは言った。

「嬉しいんです。嬉しくて、たまらないんです……。良かった。ペルソナさんが、ルシファー様で、良かった。あなたが生きていてくれて、良かった……」

嬉しさと涙で、声をにじませていた。

「どうして、どうしてもつと早く、言ってくれなかったんですか」

「すまない……。私は、怖かった。怖かったんだ」

ルシファーもまた、セレネをかたく抱きしめていた。

「そうすることで、何かが変わってしまうことが、怖かった。なによりも、君の傍にいらなくなるのが、一番、怖かったんだ。だから言えなかった。それに私は、赦されない罪を犯していたから……」

今まで抑えていた感情を解き放つように、ルシファーも涙を流していた。

抱き合い、涙する二人の姿を、慈愛に満ちた眼差しでしばらく見守っていたラウスが、ふと、口を開いた。

「ルシファー。お前の言う、赦されざる罪のことだが……。お前は分かっているのだろうか？ あの出来事が、イルヴィナの策略であったことに」

涙を拭わぬまま、ルシファーが顔を上げる。

イルヴィナ、とはルシファー亡き後、その後を継いだ今の魔王の名であった。

「」

「どうなのだ」

すでに、ルシファーとセレネは、離れていた。ルシファーは、顔を俯かせている。

「……分かっていたさ」

「ならば何故、未だにそれを心の枷にしているのだ。お前は、謀られただけなのだぞ」

「だからといって、それで私の罪が消えるわけではない。あのときも、そう言った。私が彼女を手にかけたことには、変わりはないの

だから……」

悲痛な声で言い、ルシファアは拳を握る。
深い哀しみに、身を震わせている。

「魔王様」

セレネが、彼の握った拳にそつと手を寄せて、まっすぐにルシファアを見た。

「百年前、一体、何があつたのですか……？」
問われ、彼は、すぐには答えられなかった。
沈黙が流れる。

「……おれが代わりに話すか、ルシファアよ」

ラウスが、ぽつりと言うと、

「いや……」

意を決するように深く息を吸い込み、ルシファアは顔を上げた。

「私が、話す。あのときにあつたこと、全てを……」

そうして、彼はセレネの手に己の手を重ねて、語り始めた。
全ての始まりとなつた、あの百年前の出来事を。

百年前のことである。

まだ、人と魔族とが共存していた頃。

魔王ルシファアは、たびたび公務を抜け出しては、人と魔族との
子供を王宮へ集め、皆で遊ぶということを繰り返していた。

その日も、ルシファアは公務を抜け出し、人の子供たちと、かく
れんぼをして遊んでいた。

「陛下！ どこにおられるのですか！ 陛下！」

声を張り上げ、自分を探す臣下たちを陰から見やりながら、

「しっ！ 静かにね……」

共に隠れていた人の子 シルフィーユという名の、歳の頃八つ

の少女に、小声で告げる。

臣下が通り去ってゆくのを見届けてから、ルシファアの袖を、シルフィーユが二度、引っ張った。

「ねえ、ルシファアさま。かくれんぼしてて、だいじょうぶなの？」

「大丈夫だよ、シルフィーユ。あのオジさんはね、毎日座ってばかりで運動不足なんだ。だからこうして、私を探させる形で運動させてあげないと」

「ルシファアさまも、運動不足？」

「そうさ。だからこうして、たまに皆と遊んで、身体を動かしているんだ」

「うそばかり。ルシファアさま、しょっちゅうあそんでるじゃない」

「はは、確かに……」

苦笑して、ふと、何かの気配に気付き、ルシファアは顔を上げた。

「どうしたの？」

「いや、オニのヘイゼルが、今、あっちに見えたような気がするね」

「大変！ はやく逃げないと」

「そうだね。それじゃあ、二手に分かれよう。シルフィーユはそっちから逃げてくれ。私はこっちから逃げるよ。ヘイゼルから逃げられたら、中庭の噴水前で落ち合おう」

「うん。じゃあ、またあとでね、ルシファア様」

「ああ、また後で」

ぱたぱたと、シルフィーユは駆けだしていった。

その後ろ姿が遠くなり、見えなくなったとき、

「いつまで遊んでいるつもりだ、ルシファア」

頭上の方から、ねっとりとした暗闇のような声が降ってきた。見上げなくても、それが誰なのか、ルシファアにはすぐに分かった。

「ラウスか。久しぶりだな」

「まったく……、たまにこうして来てみれば、お前の家来どもに、お前を探してくれと頼まれる。仮にも、魔王だろう。少しは、遊び

を控えたらどうだ」

ふわりとラウスが降りてきて、ルシファーの前に立った。

「王宮内は妙にぴりぴりしていて、息が詰まりそうなんだ。こうして息抜きでもしなければ、とてもやってられないよ」

ルシファーは、わざとらしく肩を竦めている。

「よく言ったものだな……」

ふう、とラウスがため息をつく。

「なあ、ルシファーよ。イルヴィナの事は、知っているだろう。急に声を落とし、ラウスは言った。

「あの男か。ずっと魔王の座を狙っている……。あの男が、どうかしたのか」

「とぼけるなよ。奴は、王宮内の反人間派の筆頭だ。お前を消し、その後釜について、我らと人間との共存を崩すことを狙っている。

そのためならば、どんな手段も厭わぬはずだ。そいつが近頃、なにやらこそこそと動き回っているようだぞ」

「そのようだな。なんとも、物騒なことだ」

あくまで、ルシファーは楽観的な言い方を崩さなかった。

ラウスがふん、と鼻を鳴らす。

「それが分かっている、あえて臣下に置いているお前のほうがよほど物騒だ」

「なに、危険分子はわかりやすいところに置いておくのが一番さ。

それに、今はそうであっても、皆、いずれ気付く。この共存が何よりも意味のあることだと。共存、調和、秩序は、すえ永い平穏につながる。それに気付かぬなど、それ以上に悲しいことはない」

「いずれ気付く、だと。またお前は、そんな悠長なことを」

ラウスは、呆れた眼差しを向けた。ルシファーは、ただ、静かに微笑している。

「お前は優しいな。優しすぎる……。その優しさが、いずれお前自身を殺してしまいそうで、おれは怖いよ」

「ほう、ラウスでも怖いものがあるのか。これはいいことをきいた」

「からかうな。おれにだって怖いものはある。親友であるお前が消えてしまうことは、なにより怖い」

それをきいて、ルシファーが小さく笑い声をもらす。

「ラウスこそ、優しいな」

「お前ほどではない」

見ると、ラウスは厳しい眼差しで見つめてきていた。

ルシファーはため息をつき、

「せいぜい、気をつけるさ」

「そうしてくれ。お前が消えて悲しむのは、おれだけではないのだから」

言つて、ゆつくりと、ラウスはきびすを返した。

「皆を悲しませることだけはするな」

そう呟き、辺りに溶け込んでしまうように、姿を消した。

「皆を悲しませる、か。どうかな。私にはわからないよ、ラウス…」

ルシファーは、愁うように目を細めている。

「……おお、そうだ。シルフィーユと合流するんだったな。いけない、いけない」

思い出したように物陰から出て、中庭の方へと足を運んだ。

待ち合わせの噴水前に、なにやら、子供達が集まっていた。

「皆、どうしたんだい？」

ルシファーが駆け寄っていくと、振り向いた子供達が、それぞれ、大きな瞳に涙を浮かべていた。

「ルシファー様、たいへんだよ」

「シルフィーユが、シルフィーユが急に倒れちゃったの」

「なんだって……」

息を飲み、子供達が囲んでいたシルフィーユを見た。

そこへ倒れていたシルフィーユは、顔を真っ赤にし、息も荒く、苦しんでいた。

「シルフィーユ！」

叫んで、彼女を抱き上げる。

「どうしたんだ、シルフィーユ。何があった」

荒く息をはくばかりで、彼女は答えられない。

「おれが見つけたときには、もう、倒れちゃって……」

ヘイゼルが言った。

「ずっと苦しんでるの」

「ねえ、ルシファア様、なんとかして！」

「ルシファア様！」

「シルフィーユを助けて！」

周りの子供達が、口々に言う。

ルシファアは、腕に抱いたシルフィーユの額に、手のひらを置いた。神経を研ぎ澄まして、彼女の身に何が起こっているのか、魔力を使ってそれを探る。

じつと目を閉じていたルシファアが、はっと顔をあげ、思わず、

「なんとということだ……」

呻くように、呟いていた。

シルフィーユの身を襲った異変、それは病魔だった。それも、ただの病魔ではない。なにかしらの、呪術によってもたらされたものである。呪いと言ってもいい。

誰がこのような真似を……。

思って、真つ先に、ある男の顔が浮かんだ。

魔王の座を狙っている男、イルヴィナの顔が。こんなことをしかなないのは、あの男しか考えられない。

ふつつつと怒りが込み上げてくるが、同時に、今はそんな場合ではないとも思った。

シルフィーユを助けなければ……。

子供達を帰し、ルシファアはシルフィーユを抱いたまま、急ぎ、書物庫へと向かった。

ソファにシルフィーユを寝かせ、呪術関係の書物へ、次々に目を通してゆく。

彼女を苦しめているものが呪術によるものであることは分かったが、それはルシファアの知るどの呪術とも異なる、全く未知のものだった。その呪術の正体と、術の解き方を知る必要があったからだ。膨大な蔵書を、一つ一つ調べてゆく。

時折、目を休めるように書物から離れては、シルフィーユに癒しの術を施して、

「きつと、君を助けてみせる」

小さな手を握って、言った。

そのたびに、シルフィーユはうつすらと目を開けて、

「うん。ルシファアさま、信じてる……」

小さく微笑んでみせるのだった。

一日、二日、貪るように、蔵書へ目を通した。

癒しの術もあまり効果はなく、シルフィーユはたびたび、苦しみの声を上げた。

そして、三日目。自分を呼ぶ臣下の言葉もきかず、食事にも手をつけずに、最後の書物へ目を通し終わったルシファアは、力なく、その書物を取り落としした。

そろそろとシルフィーユのもとに歩いて行き、その小さな手を握る。

「ルシファアさま……？」

微かに目を開き、シルフィーユがルシファアを見た。

「ルシファアさま、だいじょうぶ？」

彼のやつれてしまった頬に、シルフィーユは、もう片方の手を当てた。

その手に、自分の手を重ねるようにして、ルシファアは小さく頷いた。

「わたし、しんじょうの？」

まだ子供だというのに、覚悟していたのだらう。彼女が、ぼつりと呟く。

「そんなことはない。言ったはずだ。私が、きつと君を助けてみせ

るって」

そう返したが、実のところ、手立てが無かった。

書物によると、彼女に掛けられた病魔の呪いは、禁術である。

長い準備期間と、いくつかの難しい条件が必要となるが、一度成立してしまつと、たとえ魔王の魔力をもつてしても、決して解くことができない。　　そういう呪いだった。

なぜ、私にかけなかったのだと、ルシファーはこの状況を憎んだ。もしもイルヴィナがこれを実行したのだとしたら、真つ先にルシファー自身を殺してしまえばいい。そうすれば、簡単にカタがつく。だが、よく考えてみれば、その理由はすぐに分かった。

彼はルシファーを苦しめたいのだ。

直接殺すのではなく、大切なものを失わせることで、苦しみ抜かせる。そうしておけば、後で簡単に始末をつけてしまえる。そういうつもりなのだろう。

その企みは、成功したと言わざるを得ない。

あと、ルシファーにできることは二つ。

呪いによって、血を吐き、苦しみながら死んでゆく彼女を看取るか、あるいは、さらなる苦しみ彼女を襲う前に、ルシファー自身の手で、彼女を安楽死させるか……。

もう、それぐらいしか、彼にできることは残っていない。

あるいは、術を掛けたのがイルヴィナだとしたら、彼ならば、呪いを解く手段を、もしかしたら持っているのかもしれない。だが、書物にある情報が正しければ、それも儚い期待でしかない。

それに、もしあるのだとしても、あの男が解呪の方をルシファーへもらすとは、とても考えられない。

（何が魔王ルシファーだ。私は、何もできないではないか。目の前で苦しむ、たった一人の少女すら、救うことができないではないか……！）

「ねえ、ルシファーさま」

シルフィークの声に、顔を上げる。

「ルシファーさまが、この病気を治してくれたら、わたし、またみんなとかくれんぼしたいな。このまえば、わたしのせいで途中でやめちゃったから……。こんどはね、わたしがオニになるの。それで、みんなつかまえてやるんだ」

熱に浮かされながら、彼女は笑っていた。苦しそうに笑っていた。この子は、なんて強い子なんだ……。思い、ルシファーは二度、頷いた。

「うん、うん。今から楽しみだね」
答えながら、

(この子をこれ以上、苦しめたくはない。苦しむ顔を、見たくない……)

ルシファーはそう、心を決めた。
胸が張り裂けんばかりの決断だった。

自分の手で、彼女を安楽死させる。私が、この子を殺す……。
頬に当てられた手に己の手を重ねたまま、もう片方の手で、シルフィユの顔にそっと触れ、その頬をなでた。

なでながら、ルシファーは魔力を使い、彼女へ死術を施していた。
不意に、シルフィユの表情が、楽になった。

「あれ……？」
ぱちりと、彼女は目を開いた。
「苦しくなくなってきた。ねえ、ルシファーさま。苦しくなくなってきたよ」

その顔に、ひまわりのような笑顔を咲かせた。
「病気、治してくれたんだね。すごい、ルシファーさま。わたし、嬉しい」

笑いながら、小さな手で、瞼をこすり始めた。
「あれ……？ でも、なんだか、眠くなってきた……」
その声が、だんだんと弱々しくなっていく。

シルフィユの言葉に頷いてやりながら、ルシファーは涙を流していた。

「ルシファーさま、どうして、泣いてるの……?」

「嬉しいからだよ、シルフィーユ。君が治って、嬉しいからだ」
声を震わせながら、精一杯、嬉しそうにルシファーは答えた。

もはやこんな嘘を吐くことしかできない自分が憎かった。

「ね、シルフィーユ。またみんなで遊ぼう。たくさん、かくれんぼをしたり、鬼ごっこをしたりして、遊ぼう。私もずっと付き合おうよ。必ず……」

眠そうに、目を瞑ったり開いたりを繰り返しているシルフィーユに、ルシファーは語りかける。彼女の意識を、つなぎ止めるように。だがそれは、決して叶うことのない望みだった。

背筋に冷たいものが走り、頭の中で何かが、さあっと引いていくような感覚が、ひっきりなしにルシファーを襲っている。

シルフィーユは笑みをこぼして、答えた。

「うん。絶対だよ、ルシファーさま」

その笑顔に、さらに涙があふれた。あふれて、止めることができなかった。

やがてシルフィーユは、細めた眼差しで天井を見つめ、

「ねえ、ルシファーさま。わたし、なんだか、眠いや……」

途切れがちの声で言った。

「……大丈夫だよ。私がついているから、少し、お眠り」

ルシファーには、限りなく優しい声で囁くことしかできなかった。

「起きたら、また一緒に遊んでね……」

「もちろんさ」

「約束ね」

「ああ、約束だ」

そうして言葉を交わしたあと、シルフィーユは安心したようにゆっくりと目を閉じて、ルシファーの手へ、一度、頬ずりをした。

そして、小さく息を吸い込みながら、静かに、眠りについた。

深い、深い、永久の眠りに……。

シルフィーユの手から、力が抜けた。

息をもらし、ルシファーは両の手で、彼女の頬に触れた。

こぼれ落ちた大粒の涙が、シルフィーユの顔を濡らしてゆく。

「シルフィーユ……」

滲んだ声で彼女の名を呼び、かぶりを振った。

その端正な顔が、かつてない悲痛に歪んでいた。

もう、彼女は逝ってしまった。

自分の手の届かない所へ。

（私が、殺した……）

胸の内で呟いた言葉が、事実が、間を置かず、どんどんその重さを増してゆく。

（私が殺した……っ！）

猛烈な悲しみが、身体の奥底から、どっと突き上げてくる。

シルフィーユの亡骸を強く抱きしめ、ルシファーは悲鳴をあげていた。

「すまない、シルフィーユ。私がいたばかりに、私と、関わったばかりに……！」

幾度も、幾度も、謝罪の言葉を述べながら、泣いた。

泣き叫んだ。

悲痛な叫び声が、止めどなく、その喉からあふれた。

子供のように、ルシファーはずっと、ずっと泣き叫んでいた。

それでも涙は尽きず、声だけが枯れ果てた時、何者かが、この書庫へと姿を現した。

気配に気付き、振り向くと、イルヴィナが扉へ寄りかかるようにして佇んでいた。

彼の顔に、嘲笑があった。

口端が耳元まで吊り上がったかのような、凶悪な嘲笑である。

「やはり、殺したか。ルシファー」

主君に向かい、ぞんざいな言葉を放つ。

「魔王ともあるう者が、とんでもないことをしでかしたな」

「貴様……！」

立ち上がり、あつという間に距離を詰めたルシファアが、イルヴィナの胸ぐらを掴み、扉へその背を叩きつけた。

叩きつけ、腰の剣を抜き放ち、刃を彼の喉元へ突きつけた。まさに、魔王と形容するにふさわしい、憎悪に満ちた貌つきになっていた。

「よくもシルフィーユを……！」

「勘違いするなよ、ルシファア。手を下したのは、お前だ」「貴様！」

イルヴィナの、刃を突きつけられた喉へ、血が滲む。

表情を引きつらせながらも、彼は嘲笑を崩さず、

「俺も殺すのか？ 彼女が苦しみぬいたように、この俺も、じわじわと苦しめて殺すか？」

悪意たっぷりに言う。

ルシファアは、ぎりぎりといルヴィナの胸ぐらを絞り上げている。

「それとも、持ち前の優しさで、苦しまないようひと思いに殺してみせるか？ お前が殺した、その娘のように」

その言葉が、心の真ん中へ、突き刺さった。

ルシファアは、はっと目を見開き、剣を取り落とした。

そして、イルヴィナから手を離し、力なく、一步、二歩と、後ろへ下がった。

イルヴィナが襟を正し、笑みをさらに濃く形作りながら、ルシファアへ、ゆるゆると近づいてゆく。

「優しいなあ。お前は優しいよ、ルシファア。反吐が出るほどにな」「低く喉を鳴らす。それから、シルフィーユをちらと見やり、嗤いを交えながら、

「そうだ。お前が殺した。お前の優しさが、その娘を殺したのだ」「呆然とするルシファアへ、甘く囁きかける。

「可哀想に……。なんとという悲劇だ。お前がなにより好いていた人間を、お前は、お前自身の手で、殺してしまったのだよ、ルシファア」

心をえぐるように、優しい声色で囁く。

ルシファアは身体をわななかせ、呆然と見つめていた両の手で、頭を抱え込んだ。小さな苦鳴が、その口から、ひっきりなしにもれている。

イルヴィナは顔を上げた。

「……そしてその優しさが、今度は、お前自身を殺すだろう」

もうルシファアは、その言葉をきいてはいなかった。

イルヴィナが高笑いを残し、その場を去ってゆく。

頭をかきむしり、蹲ったルシファアの嗚咽が、さめざめと響いた。魔王が、人間の子供を殺した。その話は、人間たちに広まった。和平条約を結んでいたはずなのに、どうしてそうなってしまったのかと、当然、人間たちは激怒した。

魔王により結ばれた和平は、皮肉にも、彼の手によって崩壊を迎えたということになる。

こうなると、密かに魔族を憎んでいた者が、黙っているわけがない。たちまち、各地で人間と魔族の争いが巻き起こった。

人間たちの間では、魔王を殺してしまえという話も、持ち上がった。いた。

争いの話は、ルシファアの耳にも届いたが、彼が何かしらの行動を起こすことはなかった。

例の一件があつてからというもの、ルシファアは王宮を離れ、祠に籠もっている。

そこで、腐敗しなくなる術を施し、ガラスの棺に納めたシルフィユの亡骸へ、ずっと祈りを捧げていた。

誰が王宮へ連れ戻そうとしても、彼は耳を傾けず、その場を離れなかった。

やがて、ルシファアの話を知りつけたラウスが、血相を変えてその祠へ乗り込み、

「何があつたのだ、ルシファア」

声も荒く彼に詰め寄つたが、長年の親友を前にしても、彼はただ

祈るばかりで何も答えない。

「何故だ、何故答えない。おれが訊いているのだぞ！」

胸ぐらを掴み上げ、問い詰めるも、ルシファーは目も合わせようとしない。生気のない眼差しで、遠くを見つめるばかりだ。

ラウスは怒りに震え、叫んだ。

「いつまでそうしているつもりだ。どうせ、あの男が何かをしでかしたのだろう。お前は、はめられただけではないか。何故行動を起こさぬ！ 真実を明らかにし、あの男へしかるべき処置を下すべきだろう！ どうして、なにもせぬのだ！」

すると、顔をあげ、虚ろな眼差しでラウスを見たルシファーが、掠れた声で呟いた。

「真実……？ 明らかにするものにもない。私がシルフィークを殺したのだ。その事実が変わらない。変わらないのだ、ラウス」

ラウスは、とっさに何も言えず、乱暴にルシファーを突き放すしかなかった。

そして、彼を強くにらみつけ、

「お前はもう、何もせぬつもりか」

訊ねるが、彼は答えない。

「お前を殺すため、四人の人間が旅立ったという話が、今日、おれの耳に届いた。彼らは勇者などと、呼ばれているらしい。その者たちが、お前を殺しに来るのだぞ。お前は、どうするのだ」

言つと、ルシファーは乾いた嘲笑をもらした。

「勇者か。私を、殺すか……。良いではないか。勇者に殺される

まさしく、この私にふさわしい最期だ」

「なんだと！」

聞き捨てならない呟きに、またもラウスが声を荒げた。

「貴様、死ぬつもりか」

「……」

「死ぬつもりか、ルシファー。何もかもを捨てて、死ぬつもりなのか」

ルシファーは沈黙したままである。

「人間たちと、我らの争いはどうなる。お前を慕っている者たちはどうなるのだ。おれは言ったはずだ。皆を悲しませることだけはするな。お前は、魔王だ。皆を導いてゆかねばならぬ存在なのだぞ！ それを、お前は……」

言いかけて、止めた。ルシファーが顔を上げ、まっすぐにラウスを見据えていたからだ。彼の眼差しは、虚ろな光の中に、一筋の、強い決意が見て取れた。

「ラウス、君が思っているほど、私は強くない。皆が思っているほど、強い存在ではないのだ……。すまない。私は皆の期待には、とてもそぐえない……」

だから、頼む。死なせてくれ。
ルシファーは、そう呟いた。

「
彼に返す言葉を、ラウスはもう持ち合わせていなかった。
息の詰まりそうな静寂が流れた。」

「……おれの言ったとおりになったな」

ラウスは、力なくかぶりを振り、寂しそうに言った。

「お前は、優しすぎる……」

そして、この日初めて、彼は悲痛な表情を見せた。

死にたがっている親友と、それを止められない自分に向けた、辛い表情だった。

静かにきびすを返し、ルシファーへ、背を向ける。

「おれたちは、これで終わりなのか」

問うたのか、あるいは、ただ呟いただけなのか……。

その言葉を残して、ラウスは祠を去った。

しばらくの間、ルシファーはラウスの去った方を眺めていた。やがて、彼はふらりと立ち上がり、シルフィーユの棺に向き直って、また祈りを捧げ始めた。

月日が流れた。

また、この祠に足を踏み込む者があった。

人間だった。

四人の人間だ。

《聖女》 ミリアに《白騎士》 リヒター。 《剣聖》 ヴァイス。そして《勇者》 アレクス。 ラウスの言っていた者たちである。

それぞれ、腰に、手に、神の祝福を受けた武器を携えていた。

はじめ、魔王の姿を見た四人は、動揺を隠せなかったという。

人間の子供を殺した、残酷な魔王　そう話にきいていた彼が、自分の殺した子供の亡骸が収まった棺を前に跪き、静かに祈っている姿を目の当たりにしたからだ。

勇者たちは、どういふことだと言わんばかりに言葉を失った。

やがて祈ることをやめ、立ち上がったルシファーが、襟立てマントを翻し、勇者たちへ向き直った。

一様に、信じられないといった調子の表情を浮かべている彼らを、薄く嘲笑する。

「どうした。魔王が祈っていたのが、そんなに信じられないか」

底知れない圧力を放ちながら、残忍な声で言った。

アレクスが身構えながら、一步踏み出す。

腰の神剣カデンツアの柄へ手をかけていた。

そして、困惑と戦意を込めた瞳で、ルシファーを睨んだ。

「魔王ルシファー、これは一体、どういうことなんだ」

この問いに、彼は喉を鳴らして答えた。

「私とて、殺した者を弔う心くらいは持っている」

まだアレクスは、ルシファーを睨んでいる。

わずかな沈黙の後で、意を決したように言う。

「俺たちは、あなたを殺しにきた。その子を殺した、あなたを……」

「同胞に害なす者を、放つてはおくわけにはいかない」

「お前を生かしておいては、いつまたこちらが被害を受けるか、分からないからな」

「なにより、子供を殺したことを、私たちは赦せません。絶対に」
リヒターが、ヴァイスが、そしてミアリアが続けざまに言い放つ。

間髪を入れず、神の加護を受けた武器を、それぞれ構えた。

「……魔王、ルシファー。あなたを殺す」

力強く、アレクスは言った。その眼差しは鋭いながら、どこか悲しそうだった。

くつくつと、ルシファーが嗤った。

「よかるう。やってみよ。脆弱な人間どもよ」

その言葉を合図に、激しい戦いが幕を開けた。

もしもこのとき、ルシファーにその気があつたならば、勇者たちは決して、生きて帰ることはできなかっただろう。

いくら神の加護を受けた武器をもっているとはいえ、あくまでただの人間に過ぎない彼らが、魔族の頂点に立つ男に勝てるはずがない。

勇者たちはもちろん、死を覚悟して、戦いに臨んでいる。

だが史実では、彼らは生き残り、魔王を殺した　ということになっっている。

これは、ルシファーが、手加減をしていたからである。

わざと五分五分の戦いを演じながら、ルシファーは勇者たちの繰り出す刃を、次々に浴びた。

身を切り裂く鋭い痛みが走る度に、わき上がってくるのは、小さな歓喜だった。

(シルフィーク、私ももうすぐ、君のもとへ逝くよ)

血を流しながら、思っている。

(　いや、君と同じ場所へ逝けるとは、限らないな……)

そうも思っていた。

それでも良かった。それならば、彼女への償いのため、煉獄で永

遠に身を焼かれ続けるだけだ。

やがて、立っていられなくなり、ルシファーは仰向けに倒れた。アレクスが駆け寄り、神剣カデンツァを構えた。

ルシファーの胸にそれをつきたて、とどめを刺すつもりなのだ。しかし、彼はそれができなかった。

構えた剣を握る手が震えていた。その顔も、苦しそうに歪んでいた。

「やれ、アレクス」

「やるんだ」

「アレクス！」

仲間たちが、声をかける。だが、アレクスはやらなかった。できなかったのだ。

「本当に、話にきいたような残忍な魔王が、こんな表情をするものなのか……」

呻くように、アレクスが呟いた。

アレクスの呟きをきいた仲間たちも、ルシファーの表情をのぞき込み、はっと言葉をなくした。

ルシファーは虚ろな、哀しみに満ちた表情で、涙を流していた。すまない、シルフィーク。私もそこへ逝くよ……と小さな声で、呟き続けている。

長い逡巡の後、アレクスは剣の切っ先をルシファーの胸の前から外し、剣を納めた。

「できない。こんな表情をする人を殺すなんて、俺にはできない……」

この言葉に、異を唱える者は、誰もいなかった。

「……どうする」

リヒターが、アレクスへ訊ねた。アレクスは首を振るだけで、答えなかった。

代わりにヴァイスが答えた。

「殺したことにする」

それで良いな、とアレクスへ言う。
押し黙ったまま、彼は頷いた。
皆、武器を納めた。

リヒターが、しかるべき場所へ葬るため、棺からシルフィーユの亡骸を取り出し、抱き上げる。

そして、彼らは祠を去ろうとした。

そのアレクスの足首を、体勢を変え、傷ついた身体を引きずるようにして這い寄ったルシファーが掴んでいた。

アレクスが振り向き、ルシファーを見下ろす。

ルシファーは涙に濡れた顔を上げ、掠れた声で言った。

「殺してくれ」

頼む、殺してくれ。

彼は何度も、言った。

アレクスはしゃがみ込み、彼の手を足首から外して、両の手で握った。

「生きてくれ、ルシファー。あなたは、死ぬべきじゃない」

強い願いを込めて、言った。

そして手を離し、今度こそ、祠を後にした。

祠の中は、しんと静まりかえっている。

ルシファーはまた仰向けになり、天井を仰いでいた。

呆然と、天井を眺め続けた。

なにも考えられなかった。

しばらくしてから、ルシファーは傷ついた身体を起こした。

覇気のない瞳で、両の手を見つめる。

死ねなかった。

殺してくれなかった。

シルフィーユを殺してしまった罪を、死んで償うことは赦されなかったようだ。

涙はもう乾いている。

「生きるということか」

消えそうな声で呟く。

「生きて、償えと……」

顔を上げ、ルシファーは立ち上がった。右手で左肩を掴み、片足を引きずりながら、ルシファーも祠を去り、そのまま表舞台から、姿を消した。

その後、どこをどう行ったのか、ルシファー自身も、覚えていない。

いつしか、瘴気に包まれた森の中で、大木を背に座り込んでいる自分に気がついた。

樹齢は千年を超えているだろう、太く大きな木だ。

（この場所で、この身が朽ち果てるまで、人知れず生きてゆこう。シルフィークのため、いつまでも祈り続けよう……）

ルシファーは、そう決意した。

大木の中をくりぬき、彼はそこに家を作った。

仮面も一つ、作った。道化の仮面である。

彼はそれを身につけ、決して外すことはなかった。

それから長い時を、彼はその家で、一人きりで過ごした。

時折、森で倒れた人や魔族を助けることもあったが、誰も、彼がかつての魔王であることに気づくことはなかった。

時は流れ、ルシファーが死んだとされてから、百年。

ある日、彼は《死の森》で、一人の、夜翔族の少女を助けた。

止まっていた運命が、再び廻り始めた瞬間だった。

「あとは、君も知っただけの通りだ」

そう結んで、ルシファーは口を閉ざした。

ずっと目を細めたまま、ラウスは沈黙を守っている。

セレネは瞳を潤ませ、ぱくぱくと口を開けたり、閉じたりしながら

ら、

「そんなことが……」

やっと、それだけを呟いた。それ以上、何も言うことができなかった。

自分の手を握る、ルシファアの手が震えている。

手だけではない。体も震えていた。

唇を、血が滲むほど強く噛みしめていた。

「魔王様……」

どう声をかければ良いのか分からない自分が、セレネはひどく齒がゆかった。

「おれが……」

押し黙っていたラウスが、口を開く。

「おれはお前と別れたあの後から、ずっとお前に監視をつけていた。お前が、あの《死の森》で骨を埋める覚悟を決めてからも、ずっと

……」

ルシファアが顔を上げ、ラウスを見る。

「お前が帰ってくる日を信じて、待ち続けた。長かったよ。百

年だ。百年も待った。そして百年目のその日、お前はその娘と出会い、動いた……」

二人の旅路を、ずっと見守っていたのだとラウスは語った。

そして、二人が墓場の町に現れたところで、彼は自らの魔力を駆使し、その後、二人がこの城を訪れるように、仕向けたのだ。

彼の思惑通り、セレネとベルソナ いや、ルシファアは、この城を見つけ、ラウスと邂逅したのである。

「おれが、お前たちをこの城に招いた理由は他でもない。伝えなければならぬことがあったからだ」

ラウスは二人へ近づいてゆき、片膝をついた。

「ルシファア、イルヴィナが動くぞ。あの男、お前が消えてからというもの、やりたい放題やっている。いよいよ、人間たちへ大きな戦争を仕掛けるつもりらしい。止めなければ、大変なことになる」

この言葉に、ルシファーは自嘲するような、幽かな笑みを浮かべた。

「それを私に言っただうなる。私はすでに、死んだ身だぞ」

「何を言う。今こそ奴を討ち、シルフィーユの仇を討つべきときだろっ」

「……あの子は、仇討ちなど望まないよ、ラウス」

言われて、ラウスは口を噤み、眉を顰めた。

「それに、今更私に何ができるといふのだ。私は人間の子供を殺し、勇者に殺されたのだ。たとえ、あの男の策略であつたにせよ……」。

その事実は変わらない。もう誰も、私を求めていない。私は、必要のない存在だ」

ゆらりと、顔を上げる。

「だがラウス、君は違う。君は必要とされている存在だ。君ならば、止められる……」

ルシファーの言葉に、ラウスはかぶりを振った。

そして、駄目なのだ、と呟いた。

「それでは駄目なのだ、ルシファー」

ラウスは立ち上がり、己の非力を痛感するように、瞳を閉じた。

「おれは、お前が消えた後、あの男に立ち向かおうとした。だが、駄目だった。勝てぬということではない。駄目だったのだ。あの男を殺してしまうのは、簡単だったろう。しかし、それでは駄目なのだ。殺したあとで、どうすることも、おれにはできない。仮に、俺がああ男を殺したその後で、魔王の座についたところで、誰もついてくるものはいまい……」

なぜならば、イルヴィナがルシファーを陥れたという明確な証拠はないからだ。

あの出来事が、策略であつたことを語る事ができる者がいるとすれば、それは、あの出来事の当事者、つまり魔王ルシファーを置いて他にはいない。

策略でないことを証明できないのならば、そのラウスの行動は、

ただの謀反に終わってしまう。それでは、意味がないのだ。

「思い知らされたよ。所詮おれは、お前の、魔王ルシファアの親友
それだけの存在なのだとな。宮廷では、おれは無力だった……」
ラウスは深く、ため息をもらす。

それから、改めてルシファアを見据えた。

「お前でなければ、駄目だ。必要とされていないなど、お前の思い
込みに過ぎない。今も胸の奥底では、皆、お前を必要としている。
死んだとされている今でも、お前が帰ってくるのを、心のどこかで
待ち続けているのだ」

まさか、とルシファアは自嘲した。

「仮にそうだとしても、今更戻ってどうする。私は皆を裏切った男
だぞ。戻ることなど、赦されるはずがない……」

ルシファアの呟きに、

「そんなことはありません！」

と、セレネは声を上げていた。

驚いたように、ルシファアがセレネを見る。

「そんなことはありません、魔王様」

真正面から向き合い、ゆっくりと、セレネは繰り返した。

決して視線を外せない、まっすぐな瞳だった。

「セレネ……」

「わたし、ずっと思っていました。あなたが生きていてくださった
ら、どんなに良かったか。ずっと、ずっと、そう思い続け
ていました。だから、魔王様のお姿を再び拝見できたとき、すごく
嬉しかった……。ラウス様の言うとおりです。きっと、わたしと同
じ気持ちの人たちは、まだまだ、たくさんいるはず。そしてそのみ
んなが、思っているんです。あなたが帰ってきてくださったら、と
……」

「」

ルシファアが、口を開きかけるが、なにも言えずに、また口を閉
じた。

自分の手を握る彼の手に、もう片方の手を合わせて、セレネは続ける。

「魔王様、わたしがついていきます。もちろん、わたしなんかじゃ、とても力になれないかもしれませんが……。でも、戻ることが怖いのなら、わたしが傍にいます。だから、安心して、怖がらないで……。もしあなたが、もう戻るべき居場所がないとおっしゃるのなら、わたしが、あなたの居場所になります」

ルシファーは、はっとなった。

その言葉は、かつてペルソナ　ルシファーが、セレネへかけた言葉だった。

君の居場所がないのならば、私が君の居場所になる。

彼女を助けたくて、彼女にかけてその言葉が、自分に返ってきたのである。

「だから、お願いします。戻ってきてください……」

涙ながらに、セレネが言う。

ルシファーは、熱いものが、身体の奥底からこみ上げてくるのを感じた。

「私は……」

思わず、微かな笑みがこぼれていた。

「君を助けているつもりで、君に助けられていたんだな……」

その熱いものが、ついに瞳から溢れ、頬を伝って落ちてゆく。

「魔王様……」

「ありがとう、セレネ」

重ね合わせた手を持ち上げて、ルシファーは言った。

その瞳からは、完全に迷いが晴れていた。

「私が何をすべきなのか、今、はっきりと分かったよ。君が傍にいてくれるなら、もう、怖いものは何もない。ありがとう、セレネ。ありがとう……」

「はい、魔王様……」

ルシファーの言葉に、セレネは、さらに大粒の涙をこぼして、頷

いた。

「……ルシファー」

それを、傍らで見えていたラウスの顔に、笑みが浮かんでいる。ルシファーが立ち上がり、唯一無二の親友と、百年ぶりに正面から向かい合った。

「……ラウス、すまない。今まで、苦勞をかけたな」

「なに、かまわぬさ。親友よ」

そして二人は、百年ぶりとなる握手を、固く交わした。

このとき、セレネも涙を拭き、立ち上がっている。

「お前が戻るこのときを、ずっと待っていた。必ず止めるぞ、

あの男を」

「ああ、もちろんだ」

「わたしも行きます、魔王様。必ず、お力になってみせます」

力強い瞳で、セレネは言う。

「願ってもない」

そう答えたのは、ラウスだった。

「そうしてくれ。お前が傍にいれば、この男も奴と差し違えるなどという無茶はしまい」

「おい、ラウス……！」

「ありえぬ話ではあるまい？ お前には、前科があるからな」

「……はい。わたしの目が黒いうちは、絶対、魔王様にそんなことはさせません」

「セレネまで……」

思わず、ルシファーが苦笑いを浮かべる。

「……無茶はしない。約束するよ」

「その言葉、確かに聴いたぞ」

言いさして、ラウスはため息をつき、続けた。

「兵を集める。少し時間をくれ」

これに、ルシファーとセレネが頷いてみせた。

「集まり次第、すぐに発つ」

「ああ……」

三人が宮廷のある方角へ、顔を向けた。

「決着をつけよう」

静かに、ルシファアは言い放った。

その眼差しは、遙か遠く、イルヴィナを見据えていた。

『親友』 Friend

『了』

最終話 『魔王（Lucifer）』

最終話 『魔王（Lucifer）』

ウエルスノー地区へ降り注ぐ雪は、今日も留まることを知らない。厚く、厚く積もった雪の上に、二人の男と、一人の女が立っている。

その三人の眼前には、槍や剣、鎧で身を固めた魔族の兵達が並んでいた。

「皆、よくぞ集まってくれた」

兵達へ、男の一人が声をかけた。

しんと静まりかえった雪原に、男の美しい声はよく響いた。

一見、女性と見まごうほど顔立ちの整った、陰のある美男子である。漆黒の襟立てマントを羽織っており、腰に提げたサーベルが、銀色に煌めき立っている。

不意に、男の前に、ひときわ目立つ鎧に身を包んだ竜人が、すつと進み出た。

男へ向かい、恭しく跪いて、頭を下げる。

「また陛下のご尊顔を拝すことができるとは。言葉もありません」

深い感動を込めて、竜人は言った。

「私もだ、ジエガン。またお前と顔を合わせることができて嬉しい。長いこと、すまなかつたな」

「勿体なきお言葉……。恐悦至極に存じます」

歡喜に身を震わせるジエガンの、閉じたまぶたの端から、熱い涙がこぼれていた。

「陛下……。よくぞ、よくぞ生きていてくださいました……」

声を滲ませるジエガンへ、男 かつての魔王、ルシファーが優

しく微笑みかけた。

「此度のこと、よろしく頼む」

ルシファアの言葉に、涙を拭いて立ち上がったジエガンが、ぴんと背筋を張った。

「ジエガン・ベルローズ、この命に代えましても！」

「命は、困るな。必ず生きよ、ジエガン。信じているぞ」

「はっ！ 陛下の命とあらば、必ず……！」

高らかに叫び、ジエガンは兵の前へ下がった。

「……必ず生きよ、か」

ルシファアの隣りに立つ男、ラウス・ブランディッシュ公爵が薄く笑った。

「それはお前にも言えることだな、ルシファア」

「そうですね、ルシファア様」

傍らのセレネも、続け様に言う。

「 勿論だ。奴と差し違えるつもりはないよ。二度も、皆を悲しませるような真似をするわけにはいかないからね……」

思わず苦笑を浮かべながら、ルシファアは静かに、そう答えた。

吸血鬼の王、ラウス・ブランディッシュ公爵の命により集まった魔族兵達を前にしてのやりとりだった。

三人は小さくため息をつき、改めて、目指す方角へ顔を向けた。

その方角の、ここから遙か遠くに、現在の魔王であるイルヴィナの支配する魔王宮が存在している。

「ついに、この時が来た」

ラウスが目を細め、呟くように言った。

「ああ。いよいよだ……」

ルシファアも、眼差しを厳しく細めている。

胸に手を当て、セレネは不安げな表情で、二人を見ていた。

無茶はしないと断言してくれてはいるが、やはり、心配である。

彼にも、自分にも、何が起こるか分からないのだ。

それが怖い。不安になってしまう。

(魔王様……)

短く、息を吸い込む。

(大丈夫。わたしは、魔王様を信じる。信じてる……)

セレネは、自分に言い聞かせるように、心の中で呟いた。

ルシファーだけではない。ラウスも、魔族兵も、皆を信じる。

それが、自分にできる唯一のことだと、彼女は理解している。

もともと夜翔族は戦いに向いていない、力を持たない種族だ。し

かも女である自分は、どう頑張ったところで、皆の力にはなれない。

だから、皆を信じ、この戦いの行く末を見届ける。

それだけが、自分にできることであり、また、やらなければなら
ないことなのだ。

強い決意を秘めた眼差しで、二人を見る。

視線に気付き、セレネの方へ顔を向けたルシファーが、柔らかく

微笑みかけた。

「大丈夫だよ。必ず上手くいくさ、セレネ」

そう言われて、それでも心に蟠っていた不安が、一気に吹き飛ん
だような気がして、セレネも、

「はい、魔王様」

微笑み返しながら、そう答えた。

ルシファーは深く息を吸い込み、身体の中の迷いや不安を払うよ
うに、ゆっくりとはき出した。顔を上げ、力強い声で言う。

「さあ、征こう！」

ルシファーの声を合図に、ラウス軍は進行を開始した。

ウエルスノー地区を遙か北へ行ったところに、魔王宮がある。

魔族の聖地でもあるその場所に、魔王イルヴィナはいた。

ルシファー亡き後、その後を継いでから百年。

反人間派の中心人物として、彼は人間に対する爪を研ぎ澄まして

いた。

まもなく、人間に対して大きな戦争をしかけるつもりであった彼の下に、ある知らせが入ったのは、その折の事である。

吸血鬼の王であり、ルシファアの親友でもある仇敵、ラウス・ブランドイツシュ公爵が、魔族兵を率い、魔王宮に攻め込もうとしている。

その知らせを聞いたとき、イルヴィナは我が耳を疑った。

ラウス公爵が軍を率いたという、その部分ではない。ラウスはいつか、そのような行動を起こすだろうと、前々から睨んでいたからだ。

イルヴィナを驚かせたのは、ラウス公爵と共に軍を率いる、ある男の存在である。

(それがあの、ルシファアかもしれない、だと……?)

このことであつた。

あるいは、生きている可能性があることも、イルヴィナは常々考えていた。

(だが、たとえ生きていたとしても)

再起できるかどうか……。あの男の優しさを利用し、精神を崩壊させ、二度と再起することができないよう、イルヴィナは策を弄したのだ。

自らの手で、人間の子供を殺すように仕向ける。その企みは、これ以上ない成功をおさめたはずである。

一体、何があつて立ち直つたのかは分からないが、もし、その男が本当にルシファアなのだとしたら、これは、ことである。

「急ぎ、兵を集める。できるだけ多く。今すぐにだ!」

従者へ言い放ち、イルヴィナは大きく舌打ちをもらした。

「戻つて来たか、ルシファア。さあ、今度はどう出る?」

呟くイルヴィナの身体から、黒い殺気が噴きだしていた。

ラウス公爵率いる魔族兵達は、ウェルスノー地区を、急ぎ北上してゆく。

今いる場所から魔王宮までは、どんなに急いでも四日か、五日はかかってしまう。

「向こうが準備を整えるのには、十分だろう」

「思わせぶりなことをラウスは呟いた。

「それは、厳しいかもしれないな」

「なに、おれとお前がいる。なんとかなるだろう」

「それと、彼女も、だ」

「すまん。そうだったな」

少し前をゆくセレネの後ろ姿を見て、ラウスは薄く笑う。

「惚れたか。魔王ルシファーともあるうものが」

「何を急に」

「今さら、うろたえることでもあるまい？ おれには分かるぞ」

「分かるのか」

「当たり前だ。伊達に、お前と長くつきあってはいない」

ラウスの言葉に、ルシファーは苦笑をもらした。

「 かもしれない。彼女は、いい女性だ」

「ほう、曖昧な答え方をするのだな」

微笑んだまま、口を噤むルシファー。

「また赦されるだの、赦されないだのと考えているのではないだろうな」

「……………」

「そう悲観的になるな。目の前に訪れた幸せを、あえて自分から壊すこともあるまい」

親友の言葉に、ルシファーは唇を綻ばせた。

「幸せ、か……………」

「身分の違いなど、お前は気にしないだろう？ まあ、向こうは気

にするかもしれんが」

「それはちよつと、飛躍のしすぎじゃないのか？」

苦笑を浮かべながら答えるが、ラウスは涼しい顔のまま、

「そうか？ おれはそうは思わんがな」

どうやら、隠し事は通じなさそうだとこのを理解したのか、ルシファーが、気恥ずかしそうな表情になる。

セレネの後ろ姿を、ラウスは我が子を見守るような目で見つめた。

「……彼女は、夜翔族の最後の一人だ」

「やはり、そうなのか……」

「大切にしてやってくれ。頼むぞ」

「ああ、勿論だ」

もとより、そのつもりだった。

彼女の居場所がないのなら、自分が彼女の居場所になる。

今でもその言葉に嘘はない。

そして、

「もしあなたが、もう戻るべき居場所がないとおっしゃるのなら、わたしが、あなたの居場所になります」

彼女の言ったこの言葉が、ルシファーの胸を強く打っている。

できれば、彼女はこの戦いに巻き込みたくはなかった。

しかし彼女がいなければ、戦いに臨むことはできなかつただろう。

（すまない、セレネ。そして、ありがとう。この戦いが終わったら、必ず……）

幸せにしてみせる。

ルシファーは、そう、心に強く誓った。

ラウス軍が進軍すること、五日。目指す魔王宮が、今や、彼らの目と鼻の先にあった。

ルシファーが、ジエガンに目で合図を送る。

頷き、ジェガンが片手を上げ、軍の進行を止めた。

先頭に立つラウスとルシファーが、厳しく目を細めて、魔王宮を睨んでいる。

「かなりの数だな」

「ああ。予想していたよりも、多い……」

「おれの集めた精銳はもとより、おれとお前、そして彼女を相手にしようというのだ。数を集めねば、向こうとしても、とても立ち向かえぬだろうよ。まあ」

ラウスはくく、と喉を鳴らし、

「たとえ数を集めたところで、どうなる我らではないがな」

唇をつり上げ、白い牙をむき出しにして嗤った。

「できれば、あまり犠牲は出たくないが……」

「こんなときでも、お前は優しいのだな」

ラウスが、少し呆れたようにため息をもらす。

「あの男が説得の通じる相手ではないことぐらい、お前も承知のはずだ。多少の犠牲はこの際、やむを得まい」

「そう……、そうだな」

「気持ち分かるが、その優しさは、戦いの場では命取りになるぞ。まして、相手はあの男なのだからな」

「分かっているよ。よく、分かっている……。君の言うとおりだ」

気持ちを落ち着かせるように、ルシファーは深呼吸をした。

傍らで彼を見守っていたセレネが、不安そうに眉を引き結んでいる。

本来、こんな風に力で訴えるのは、ルシファーの望むところではないはずだ。

しかも刃を向ける相手が同じ魔族の者達となれば、なおさらのことだろう。

たとえ、憎い仇であっても、戦わずに済むなら、それに越したことはない。

（魔王様は、きっとそう考えている……）

共に旅をしてきたセレネには、それが分かった。

だが、向こうにそのつもりがないのなら、こちらがいくらそう思っていたところで無意味。それも事実。

彼としては、苦しい選択のはずだ。

「魔王様……」

セレネは、ルシファアの傍に寄り添い、囁くように声をかけた。

「無茶はしないでくださいね」

すると、ルシファアは、

「勿論さ。約束したじゃないか、セレネ。私は決して、無茶はしない。それよりも、君こそ私の傍を離れてはいけないよ」

君を守れなくなってしまっからね、と微笑みながら返した。

「はい。決して、お傍を離れません」

ずっと一緒です、魔王様。心の中で、セレネはそう付け足した。

ふとラウスが笑みを漏らして、腰の銀剣を抜き、切っ先を魔王宮へ向ける。

「さあ、戦いの時だ。皆、征くぞ！」

ラウスの号令が響き渡るや、魔族兵達が一斉に武器を抜き放ち、大地をふるわせるような鬨の声を上げた。

鬨の声と共に魔王宮へ津波のようになだれ込んだラウス軍を、待ち構えていたようにイルヴィナ軍が迎え打った。

たちまち、剣戟と怒号、そして悲鳴が辺りを包み込んだ。

セレネは、ルシファアとラウスの傍を離れず、身体の底からわき上がってくるいい知れない恐怖に身を震わせていた。

非力な夜翔族がこうした戦いの場に居合わせることは、まず無いと言っている。

あちこちで絶えず血しぶきの舞うこの光景は、セレネを戦慄させ

るには、あまりに十分過ぎる。気を張っておかなければ、今にも失神してしまいそうなほどだ。

震えるセレネの手を取り、ルシファーは走っていた。

そして二人を守るように、付き添っているラウスが剣を振るい、敵を蹴散らしてゆく。ラウス軍の手練れ数人も、飛びかかってくる敵を次々と打ち払う。それでも、イルヴィナの兵達が、どんどんあとから、続いてくる。

絶えず剣を打ち合う音が響く中、彼らは脇目もふらず、王の間を目指し、走る。

「王の間までは、おれたちが援護する。それからは、お前に任せるぞ」

「ああ、分かった」

「セレネ、何があるうとも、こいつから目を離さぬようにしてくれ頼む」

「はい、必ず。ラウス公爵」

疾走を止めずに、ラウスが力強く言う。

「忘れるな。どんなときであろうとも、我らは決して一人ではない。己を、そして仲間を信じる」

言い終わるや、目前に、王の間を守る近衛兵一団の姿。

ラウスが速度をあげ、一団のど真ん中へと飛び込んだ。空いた手を、ぶんと一振りする。いつか、ルシファーが見せた手も触れずに敵を吹き飛ばす芸当を、ラウスも見せた。悲鳴を上げ、吹き飛んだ近衛兵たちが宮壁に激突し、悶絶する。

「追っ手はおれたちに任せろ。さあ、行け。誰にも邪魔はさせぬ」

王の間の手前で、ラウスは剣を構えた。

付き従っていた魔族兵達が、その周りをかためる。

「すまない、ラウス。任せたぞ」

「ああ。……幸運を祈る」

「幸運を。親友よ」

ラウスは、不敵に笑ってみせた。

頷きを一つ。ルシファーとセレネは、ラウスらの隣を抜け、王の間へ踏み込んだ。

その途端に、静寂が訪れた。

不気味とも言えるほどに、そこは静まりかえっていた。

外の喧噪も、ひどく遠い。

まるで、異世界へと迷い込んでしまったような感覚を、セレネは覚えていた。

さらに、体の奥底を震えさせるような、悪寒。いつか、ラウスの城に導かれたときに感じたものとは、比べものにならないほどの、どす黒い気配……。

その気配の主は、二人に背を向けて佇んでいた。

外の戦いを、見下ろしているようだった。

ルシファーとセレネは、前に三步、踏み出した。

靴音が、静かな空間に、よく響いた。

こちらへ背を向けていたその男が、ゆっくりと振り返り、二人を見据えた。

一見、紳士的に見える整った顔立ちに、漆黒の瞳、毒々しいほどに赤い唇。

(この人が、魔王様の……)

セレネは、息を飲んだ。ルシファーとはまるで違う、慈悲の欠片も感じさせない冷たい光が、その男の瞳に満ちている。

男　イルヴィナは、唇をいびつにつり上げた。

「……ルシファー」

「イルヴィナ……」

「百年ぶりだな。こうして、顔を合わせるのは……」

「驚いたか？」

「いや。その可能性を、この俺が、考えもしないと思うか？」

言つて、彼は喉を鳴らして嗤った。嫌悪を催すような嗤いだった。

「もし、再びお前が、俺の前に姿を現すようなことがあったなら、お前はどんな顔をして俺の前に立つだろうか　ずっと考えていた

が……」

「かつと目を見開き、見下すような眼差しで、ルシファーを睥睨する。」

「百年前と何も変わっていない。貴様は相も変わらず腑抜けたツラをしているではないか。よくもそんなツラで俺の前に立てたな、ルシファー。今さら何をしに戻ってきた」

「言わずとも、分かるはずだ」

「まったく怖じた様子を見せず、ルシファーはイルヴィナと対峙している。」

「君を止めに来たんだ」

「止めるだと？ あのと看、俺を殺すこともできなかった腰抜けが、何を偉そうに」

「腰抜けであることは、否定はしない。だが、君を殺すという選択が最良だとは、私は思わない」

ルシファーの言葉に、イルヴィナは鼻先で嗤いたてる。

「相変わらず反吐が出るほどの優しさだな」

「なんとでも言えばいい。イルヴィナ、大人しく投降しろ。たとえ、君相手でも、できることなら、同じ魔族に刃を向けたくはない」

「甘いな。今さら、俺とお前が、言葉のみで相容れると本気で思っているのか？ 思っているのなら、もはや救いようがない」

イルヴィナが、腰の、黒剣の柄へ手をかける。

「言いたいことは、その剣で言え」

「……」

ルシファーが、ぴくりと眉を顰めた。

「どうした。できんのか？」

「……」

「どつやら貴様は、百年前の出来事から、何も学んでいないようだな」

言いながら、じろり、とセレネに目をやり、

「ほう、その夜翔族の娘、お前の女か。なるほど……、その女が、

お前の新たな拠り所、というわけだな」

不気味に嘲笑する。

セレネは、いい知れない戦慄を覚えた。

まるで身体の隅々まで犯し尽くされるような、気色の悪い感覚が、彼女を襲う。

堪えきれず、彼女はルシファーにしがみついた。

「なあ……、また、失ってみるか？ ルシファーよ」

イルヴィナが、つり上げた唇に舌を這わせる。

そのとき、

ルシファーの気配が、一変した。

「彼女に、手出しはさせない」

斬り裂くような鋭い瞳で、イルヴィナをにらみ据える。彼から放たれた圧力が、びりびりと空気をゆらした。

ルシファーの手は、腰に下げたサーベルの柄にかかっている。

「それでいい。もはや俺たちは、剣と、剣とでしか、語り合うことはできない」

それはまさに、戦いの始まりを告げる言葉だった。

もう、何も言わず、ルシファーが前へ踏み出そうとする。

彼へしがみついていたセレネが、一層、彼のマントを強く握った。

ルシファーが、セレネに顔を向ける。

「魔王様……」

消え入りそうな声で、セレネは呟く。

何も言わず、ルシファーは一つ、頷いた。

セレネはその頷きで、全てを理解した。

(わたしにできることは、魔王様の戦いを見守ることだけ……)

そろそろと、ルシファーのマントから手を放す。

「ご武運を」

小さな声で言った。

ルシファーは、口元に微かな笑みを浮かべた。優しい笑みだった。

「心配いらぬ。安心して、ここで待っていてくれ」

そつと、セレネの頬に触れる。

彼の手を通して、なにか暖かいものが、セレネの中へ流れ込んできた。

その暖かいものが、一瞬で彼女の全身を内側から包み込む。

(あ……)

と、思ったときには、ルシファアの手はもう離れている。

そして彼は、イルヴィナへ向き直り、力強く、踏み出していった。ルシファアの背を見つめながら、セレネは無意識に、自らの頬に指先を当てた。

手のひらの暖かみが、はっきりと残っている。

(魔王様……！)

思わず、そう叫ぼうとしたが、できなかった。

何故、叫ぶことができなかったのか、セレネにも分からなかった。

心配いらぬ。安心して、ここで待っていてくれ。

耳元で囁かれたかのように、彼の言葉が蘇る。

胸の前で手を組み、セレネは祈った。

必ず彼が無事に、この戦いを終わらせることを。

イルヴィナは、静かに冷笑を浮かべていた。

「ほう。あの女に、魔障壁を纏わせたな。用心深いことだ」

「君のやり口は、もう分かっている。二度と同じ轍は踏まない」

「さあ……、そいつはどうか」

さらに口端をつり上げる。

ルシファアが、イルヴィナを睨む眼差しを、さらに険しくした。

「これは、君と私の戦いだぞ」

「そうだ、その通り。これは俺とお前の戦いだ。他の誰にも、邪魔はさせない。そうだろう？　なあ、ルシファア……」

冷笑をそのままに、イルヴィナが前へ踏み出した。ルシファーもそれにならう。お互いに、抜剣する姿勢を、既に取っている。

歩みが、走りに替わった。

剣を抜き放ちながら、二人は、一気に肉薄する。

間髪を入れず、甲高い音が、辺りへ響き渡った。

剣と剣とを全力で打ち合わせた音だった。

そのまま、ぎりぎりと、鏝迫り合いをする。

左手を剣の柄尻から外し、ルシファーがその手のひらを、イルヴィナへ向けた。

イルヴィナもまた、ルシファーと同じ行動を取っていた。

両者の手のひらから、夥しい魔力が解き放たれた。

剣と剣、魔力と魔力とが、ぶつかり合い、せめぎ合う。

やがて生じた衝撃が、お互いの身体を弾き飛ばした。

床を転がりながら、すぐさま起き上がり、剣を構えるルシファー。

イルヴィナも、悠々とした様子で立ち上がり、構える。

「忘れたか。この俺も、貴様と同じ神魔の血を引きし者。こんなものではないぞ」

「それは私とて同じこと」

言うや、ルシファーが、イルヴィナへ左手を振りかざす。

その手から、破壊の風が放たれた。

魔力を孕んだ風が渦を巻き、イルヴィナへ襲いかかる。

ふん、と鼻を鳴らし、イルヴィナが手を一振り。

たちまち、彼の周りへ生じた魔力の障壁が、破壊の風を阻んだ。

阻まれた風が、王の間を吹き荒れた。

セレネが小さな悲鳴を上げる。だが、先ほどルシファーが彼女へ施した魔障壁が、揺らぐことなく彼女を守っていた。

風の吹き荒れる中、ルシファーは、すでにイルヴィナへ迫っている。

ルシファーが、イルヴィナが、激しく剣を打ち合った。

幾度も、幾度も打ち合った。

「なあ、ルシファーよ……」

イルヴィナが、口を開く。

「何故もつと早く、俺たちはこうならなかったのだろうな」

「何が言いたい」

「どうして百年も後になって、俺たちは剣を打ち合っているのだ」

この問いに、ルシファーは答えることができなかった。

イルヴィナは、嘲笑を崩さない。

「分かるか？ その、理由が。原因は、お前にある」

剣戟は止まない。

「お前があのととき、怒りにまかせてこの俺を殺していれば、こうはならなかった。魔族同士が、刃を向け合うことなどなかったのだ」

このとき、初めてイルヴィナの、余裕を感じさせる表情が崩れた。形容しがたい怒りに満ちた、歪んだ貌になっていた。

「この状況は、貴様が招いたんだ！ 貴様の甘さが！」

なおも続く弾効の言葉が、ルシファーの胸を貫く。

「貴様は魔王を名乗るべきではなかった。……貴様は、魔王にふさわしくない」

反論することは、できなかった。

「……君の言うとおりだ」

そう答えることしかできなかった。

「私は魔王にふさわしくない……。そんなことは分かっていた。分かっていたさ。それは他の誰よりも、私が一番、よく分かっている」

自分の甘さが、自分の身勝手さが、どれほど自分を慕ってくれる魔族の者達を傷つけたか。それを思うと、心が張り裂けそうになる。

「私は皆を見捨てた。皆の期待を裏切り、私は……」

殻に閉じこもってしまった。そして百年も、皆を放っておいてしまった。

それがルシファーの、赦されざる罪。

「教えてくれ、イルヴィナ。その罪を償うことすらも、私は赦され

ないのか……？」

剣を打ち合い、二人が離れる。ルシファーは剣を下ろしていた。イルヴィナも、剣を下ろした。そして冷めた目で、ルシファーを見つめた。

「今さらだな」

切り捨てるように、冷たく言い放つ。

ルシファーは言葉を無くした。

ゆっくりと、イルヴィナが黒剣の切っ先をルシファーへ向ける。

「死して償え。今や貴様にできる償いは、それだけだ」

氷のような声で、断じた。

自らの握る剣を、ルシファーは迷うように見つめる。

「わ、私は……」

死して償うことは間違っていると思う。

だが、生きて償うことも赦されないのならば、一体、どうすればいい。

ルシファーには、分からなかった。

そのとき、

「駄目です、魔王様！」

セレネの声が、響き渡った。

はっとして、彼女を見る。

彼女は、涙を浮かべながらも、鋭い瞳でルシファーを見据えていた。

「止めてください。もしあなたがここで死を選んだら、わたしは、絶対にあなたを赦しませんよ。絶対に……」

気丈に、言い放つ。

「わたしだけじゃありません。ラウス公爵様も、ジエガン様も皆、きつとあなたを赦さない。死で償うことは間違っている。生きることですか、罪は償えない……。そう言ったのは、他でもない、あなたなんですよ、魔王様」

セレネの言葉に、イルヴィナが反応した。

「女……、余計なことを！」

憎悪の言葉を吐き、左手に、強い魔力を集中させる。

それはルシファアの施した魔障壁ごと、セレネを簡単に消し飛ばすことができるほどの、凄まじいものだった。

セレネの表情が凍り付く。

（セレネが危ない）

そう思ったとき、すでにルシファアは、その行動を取っていた。あつという間にイルヴィナへ迫るや、力強く剣を一閃させ、魔力の集中する左腕を斬り飛ばしたのだ。

時が止まったかのように、全てがゆっくりで、静かだった。

斬り飛ばされたイルヴィナの腕が、音を立てて床に落ちた。

血だまりが、広がってゆく。

「ルシファア……」

呻くように、イルヴィナが呟いた。

「あ……」

我に返り、ルシファアは、腕を無くしたイルヴィナを見た。

脂汗を流しながら、鬼気迫る様子で、イルヴィナは唾っていた。

「今のは、いい貌だったぞ。まだ寒気が止まらん」

引きつるような嗤い声をもらす。

「腕を、飛ばした。さて、次はどうする？ 右腕か、左足か右足か。

それとも、首か。さあ、どうだ。お前はとうしたい？」

傷口を押さえながら、挑発するように訊ねる。

しかし、ルシファアはもう、彼へ刃を向けることはできなかった。

剣を下ろす。

それを見て、イルヴィナはくくく、と喉を鳴らした。

「これきしで臆したか。だから、貴様は甘いというのだ」

口端をつり上げた、刹那、

セレネが悲鳴を上げた。

とっさに、そちらを見る。

足下から伸びた黒い影のようなものが、彼女を羽交い締めにして

いた。

「セレネ……っ」

駆け寄ろうとしたルシファーに、イルヴィナが体当たりをぶちかました。

吹き飛び、倒れた隙に、イルヴィナはセレネのもとまで走りより、黒剣の刃を彼女の喉元に突きつけている。

ぐ……、とうめき声をもらすルシファーに、イルヴィナが叫んだ。

「切り札は最後まで取っておくものだ。そうだろう、ルシファー！」

「影魔獣か、くそ……！」

起き上がり、剣を構える。が、

「動くなよ。動けば、この女がどうなるか……」

そう言われると、もう、何もできない。

「卑怯者！」

影魔獣に締め上げられながら、セレネが叫ぶ。魔力による攻撃を防ぐ魔障壁も、こうした物理的な攻撃手段には効力を為さない。

まして、セレネは力を持たない夜翔族。抵抗のしようがなかった。

「どうとでも言う方がいい」

意に介した様子もなく、イルヴィナは嘲笑した。

刃を突きつけられたセレネの首に、薄く血が滲む。

「止める、イルヴィナ！」

「黙れ、ルシファー。全ては貴様のせいだ。貴様の甘さが、この事態を招いている」

影魔獣、そしてセレネと共に、イルヴィナはじりじりと後退する。

「くっ……」

ルシファーは、それを見ていることしかできなかった。

うかつに手出しをすれば、セレネの命はない。

（くそ！ どうすればいい。どうすれば……）

思っている内に、もうイルヴィナ達は、外へ飛び出すことができる位置にまで下がっている。

「イルヴィナ、これは私と君との戦いだと言ったはずだ！ 彼女を

巻き込むな！」

「元々、巻き込んだのは貴様の方だろう。今更、勝手なことを抜かすな」

冷ややかに笑い、

「お前だって、それなりの覚悟があつて、ついてきたのだろう？ん？」

セレネへ、ささやきかける。

寒気を覚えながら、セレネはとっさに顔をそらし、目を強く瞑つた。

「ルシファー。俺がここでこの女を殺したら、どうする？」

挑発の言葉に、ルシファーは唇を噛みしめる。

そんなことをされたら、今度こそ、この心は壊れてしまう。そして恐らく、イルヴィナを殺してしまうだろう。躊躇いも、容赦もな
く……。

「止めてくれ。頼む。それだけは……」

声を震わせ、ルシファーが懇願する。

「くく……」

イルヴィナの顔が、これ以上ない愉悦に歪んだ。

「安心しろ。まだ殺さんさ。もつともつと、貴様の苦しむ顔を見てからでなければな」

ちらと、イルヴィナが外を見やり、

「とはいえ、これでもいささか、分が悪い。一旦、退かせてもらう
言った、次の瞬間、耳をつんざくような竜の嘶きが、大気を震わ
せた。

飛行竜の、それだった。

強風を巻き起こしながら、竜が、イルヴィナの後ろへと降り立つ。

「さらばだ、ルシファー！ またいずれ、相見えようぞ！」

その言葉と共に、イルヴィナ、そしてセレネを掴んだ影魔獣が、
飛行竜の背へと、飛び乗った。

「待て、イルヴィナ！」

すぐさまそちらへ向かい走り出すが、もう、遅い。イルヴィナらをのせた飛行竜が、翼を羽ばたかせ、灰色の大空へと飛び立ってゆく。

（奴は、こうなることを予期して、逃げ道を……？）

そうとしか、考えられなかった。

「魔王様　　！」

長く尾を引く、セレネの叫びが響く。

「セレネ！」

叫ぶが、もう追いつくことはできない。

かといって、魔力で叩き落とそうとすれば、セレネが危ない。

飛んで追おうにも、エア・ボードでは空は飛べないし、その他に空を飛ぶ術を、ルシファーは持ち合わせていなかった。

両膝をつき、遠ざかる竜の姿を、茫然と眺めるしかなかった。

「セレネ……」

私はまた、大切な人を……。

両の手を強く握りしめ、血が滲むほど、唇を噛みしめた。

「畜生……！　また、私は……！」

悔しさに、涙がこぼれた。

と、そのとき　　。

もう一つの、竜の嘶きを、ルシファーははっきりとその耳で聞いた。

「魔王様！　魔王様！」

遠ざかってゆくルシファーに向かい、セレネは、必死に叫んだ。影魔獣による束縛は解かれてはいないが、もう剣は突きつけられていない。

「違うな、セレネとやら。魔王は、この俺だ。あの男ではない」

イルヴィナが、ぼそりと言う。

「わたしは、あなたなんて……魔王とは認めません！ あなたみたいな冷たい人……」

「魔王にふさわしくない、とでも？」

忌々しげに、鼻を鳴らす。

「そんなことは分かっている。俺が魔王にふさわしくないことなど、初めから」

「え……？」

イルヴィナの思いがけない科白に、セレネは言葉を失った。

「俺がどれほど望もうとも、決してあの男に取って変わることはできない。そんなこと、分かりきっている。だからこそ、赦せないんだよ。あの男の甘さが……」

腕の傷口を魔力で止血し、イルヴィナは吐き捨てるように続ける。

「あの男は、優しい。優しすぎる。人の王に生まれていれば、それも良かったかもしれない……。だが、あの男は、魔族の王。魔族の王がそんな甘ちゃんでは困るのだ。俺の言っていることが分かるか？ セレネよ」

セレネは、返事をすることも、首を振ることもできなかった。

「百年前、あの男の手により、人間と魔族は、共存の時代を迎えた。だがその共存の時代であれ、魔族は人間に仇をなす、人間よりも高貴な存在だ」と、そう考える古い思想の者が居なくなったわけではない。この俺のようにな。その古い思想を持つ者達をのさばらせておけば、いずれはどうなるか……簡単に、想像はつくだろう」

イルヴィナの紡ぐ言葉を、セレネは、固唾を呑んで聴いている。

「優しいだけでは、魔族の王はつとまらない。いざというときには、たとえ同胞であろうとも、容赦なく斬り捨てる。そんな苛烈さを持つ者でなければ……」

「だから、あなたは……」

人間の子供を、ルシファー自身に殺させるように、策を弄した。

そして願わくは、同じ魔族の者であるイルヴィナを殺すほどの苛烈さを目覚めさせようと、己の命を駆けて……。

しかし、ことは、イルヴィナの思うようには運ばなかった。

ルシファアは罪の重さに潰れ、全てを投げ出し、死を選んだ。結果として、彼は生き残ってしまったが、罪の意識に苛まれることになった。

「それで潰れてしまうなら、その程度の男……。だが、あの男は戻ってきた。百年も後になってだが、確かに、戻って来た。しかしあの甘さは、相変わらずだった」

イルヴィナは、ぎりぎりど、齒を食いしばっている。

そして、セレネを鋭い眼で見据えた。

そのとき、セレネは何故か、恐怖を感じなかった。

「わたしも、殺すんですか……？ それとも、殺させるんですか……？」

自分でも驚くような言葉を、知らず知らず、発していた。

「……」

答えず、イルヴィナは眼を伏せた。

僅かな沈黙の後、小さく鼻を鳴らし、

「もうあんな、後味の悪いことはごめんだ」

と、答えた。もの悲しそうな声だった。

その言葉で、セレネは確信を持った。イルヴィナがどういう人物なのか……。

残忍に振る舞ってはいるが、この人は、魔族を大切に思っている。ルシファアと同じように、魔族同士が刃を交えることを、良しと思っていない。それに、恐らく、人間の子供にあんな残酷な仕打ちをしたことも、心の奥底では、強く後悔しているのではないだろうか……。

そして誰よりも、彼はルシファアを敬愛している。あの策略も、突き詰めれば、彼を思っていたことだったのだ。

(この人は、自分の命を賭けて、魔王様を変えようとしている……)

そう思ってしまうと、もう、彼を憎むことはできなかった。

「……辛かったんですね」

声を掛けると、イルヴィナは顔を上げた。

涙が一筋、頬を流れていた。唇を歪め、嗤っていた。強がるような嗤いだった。

そして突然に、竜の嘶きが、セレネの耳を叩いた。自分の乗っている、飛行竜のそれではなかった。

「来るぞ。舌を噛むなよ」

え、とセレネが返す間も無く、激しい衝撃が、彼女を襲った。

見ると、もう一匹の飛行竜が、こちらの竜へ、食らいついていた。その飛行竜が、あのジェガンであると、セレネには一目で分かった。

揺れる。回る。どちらが上で、どちらが下なのか、たちまち分からなくなる。

「セレネ殿！」

ジェガンの声が聞こえた。

「セレネ殿、飛べ！」

その声で、セレネは我に返った。いつの間にか、影魔獣の束縛はなくなっている。

イルヴィナを見る。イルヴィナは、右手で竜の背にしがみつき、こちらを見てはいなかった。

(イルヴィナさん……)

彼にかける言葉を、もうセレネは持ち合わせていない。

セレネは、竜の背を蹴って、宙へ飛び出した。体が、落下を始める。

かなり高い。遙か遠くに、地面が見える。上と下を、即座に把握する。

ローブを脱ぎ捨て、背中の翼を、めいっぱい広げた。

大丈夫。必ず飛べる。

自分に言いきかせ、翼を、羽ばたかせた。

ずっと長いこと、飛んでいなかったけれど、飛び方を忘れてはいなかった。

落ちる速度を、翼で制御しながら、セレネは下を目指す。

自分のすぐ後ろで、妙な声がした。顔だけを向けると、影魔獣が、影の翼を広げ、自分を追ってきているところだった。

不思議と、怖いとは感じなかった。

影魔獣が、腕のようなものを伸ばす。セレネを再び、捕まえようとしているのだ。

その腕を、下の方から突っ込んできた何かが、消し飛ばした。

ラウス公爵だった。セレネと同じ蝙蝠の翼を広げ、空を飛んでいた。

「ゆけ、セレネ。こやつはおれに任せろ」

剣を抜き放ったまま、ラウスが言う。

セレネは頷き、ラウスに背を向け、降下を開始した。

落ちる。遅すぎず、かと言って早すぎず。翼をはためかせながら、降りてゆく。

下を見ると、王宮の制圧を終えたラウス軍が見えた。そして、

「セレネ！」

ルシファアの姿も、あった。

「魔王様！」

叫びながら、セレネは、ルシファアの前へ降りた。

ルシファアが彼女の手を取り、彼女は、ゆっくりと地に足をつけた。

「無事かい？」

「ええ、大丈夫です。それよりも……」

不安そうに、空を見上げる。ラウスが影魔獣と対峙し、ジエガンは、イルヴィナを背に乗せた飛行竜に食らいついたままだ。

「ラウスも、ジエガンも、大丈夫さ。信じよう」

「はい。それと、あの……、魔王様、あの人は……」

イルヴィナが、本当は悪い人ではないということを、どうしても

伝えなかった。

「セレネ……」

ルシファーは、セレネを抱き寄せると、優しい声で囁いた。

「分かっている。分かっているんだ……」

どこまでも優しい声色だった。

（　　そうか。だから、魔王様は、あのとき……）

あの人を殺すことが、最良とは思えない　　そう言ったのだ。

「……信じます。ラウス公爵様も、ジエガン様も……。そして、あの人も」

セレネの言葉に、ルシファーは、そつと頷いた。

二人は、空を仰いだ。そして彼らの戦いを、見守る。

黒い翼を広げ、影魔獣が、ケタケタと声を上げる。

ラウスは低く喉を鳴らし、白い牙をむき出しにした。

「このおれに、お前ごときが敵うと思っっているのか、愚か者め」

嘲笑し、銀剣の切っ先を向ける。

「同じ《闇の眷属》の者であろうと、おれは容赦はせん。覚悟するんだな」

耳を劈くような音を発し、影魔獣がラウスへと掴み掛ろうとした。

その腕を、いともたやすくラウスが斬り飛ばす。

斬り飛ばされた腕が、黒い霧と化し、すぐさま影魔獣の下へ舞い戻り、再び腕を形成する。影魔獣には、いかなる物理攻撃も、無意味なのだ。

「ふん　　」

面白くもなさそうに、ラウスが鼻を鳴らした。

すぐさま、影魔獣が襲いかかってくる。

身体を、鋭い槍のように変化させ、次々と、ラウスへ打ち込む。

ラウスはその槍を、造作もなく斬り払ってゆく。斬り払われた槍は、霧となり、主の下へ戻り、すぐさま再生する。

「馬鹿め」

低く、ラウスが叫んだ。

飛来した槍を斬り払い、左手をかざす。夥しい魔力が、集中していた。

その意味が分からなかったのか、影魔獣が、わずかに動きを止めた。

転瞬、ラウスの左手から、凄まじい魔力の波動が、放たれた。

まさに、ひとたまりもなかった。

まともに魔力の波動を喰らった影魔獣は、甲高い絶叫をあげ、跡形もなく、消し飛ばされていた。

「相手にもならん」

呟き、銀剣を鞘へ納める。そして、ジェガンの方へ、目をやった。ジェガンはまだ、イルヴィナを乗せた飛行竜の首へ、食らいついていた。

鋭い牙が食い込み、大量の血が流れ出している。

たまらずに、飛行竜は苦悶の悲鳴を上げながら、暴れ回っている。だが、ジェガンは離さない。むしろ、さらに強く、強く噛みついて、離さない。

飛行竜の口からも、血の泡が噴きだしていた。

やがて、みりみりと、ジェガンの食らいついた首から、異様な音がした。

肉が引き裂かれる音だった。

両の手で飛行竜の口と身体を掴み、ジェガンは、力任せに首をひねった。

飛行竜の首の肉を、食いちぎったのだ。

竜の凄まじい絶叫が、大気をびりびりとふるわせた。

首から血を噴きだし、宙で暴れ回った飛行竜は、やがて力をなくし、墜ちてゆく。

しがみついていたイルヴィナが、流れてきた竜の血に手を取られ、竜の背から滑り落ちた。

「くっ……」

飛行竜と急降下してゆき、地面に叩きつけられる。

地面に激突する寸前、魔力を集中させて衝撃を和らげたが、それでもかなりの衝撃が、イルヴィナの身体を打ち抜いた。

小さく血を吐きながら、なんとか身を起こしたイルヴィナの視界の端に、何者かの足が映る。傍に落ちていて己の剣を掴みながら顔を上げると、ルシファーが、こちらを静かに見下ろしていた。

周りを見渡してみると、ラウスの兵が、自分を取り囲んでいる。

遅れて、ラウスと、竜人の姿に戻ったジェガンが、ゆっくりとルシファーの後ろへ舞い降りていった。

「……どうやら、ここまでのようだな」

イルヴィナが、掠れた声で言い、剣を捨てた。

ルシファーは、ただ、黙っていた。

「さあ、殺せ。俺はもう、逃げも隠れもせん」

腕を広げ、イルヴィナはにい、と嗤った。

「ここで殺しておかねば、俺はまた何をしでかすか分からんぞ、ルシファー」

殺せ。俺を、殺して見せる！ イルヴィナは、何度も叫んだ。

だが、ルシファーは、首を縦には振らなかった。

「言っただけだ。君を殺すことが最良だとは思えない。だから私は、君を殺せない……。殺せるはずがない」

「ふざけるな！ そんな寝言が、通じると思っているのか！」

「手段はどうあれ、私を想って動いた者をどうして責められる」

「……っ！」

イルヴィナが瞠目し、言葉を詰まらせる。

「そうだろう、イルヴィナ。君は私を変えるために、あんなことを……」

「違う！俺は貴様が憎かった。それだけだ」

「そうか？ ならばどうして君は、セレネを手に掛けなかった。彼女を失うことが、私に再び痛手を与えることだと、君は分かっていたはずだ。なのに、君はそうしなかった」

「それは……」

何か言おうとするが、二の句が継げない。

「君は彼女を殺さなかった。それは、君が優しいからだ。違つかい？」

「優しいだと？ この、俺が？ 馬鹿なことを……」

「そうかな。 君はあるとき、シルフィーユを呪った罪を、死して償うつもりだったんじゃないのか？ 怒りにまかせた私に、殺されることで……」

「……………」

「けれど、やはり罪は、死して償うものではないと、私は思うんだ。生きて償わなければならぬ」

ルシファーは、姿勢を落とし、イルヴィナへ手を差し伸べた。

「生きる、イルヴィナ。生きて償うんだ。私とともに……」

イルヴィナは、顔を上げた。両の目から、涙があふれていた。

そして力なく、彼は笑った。

「お前は、優しいなあ。本当に、優しすぎる……」

言いながらも、イルヴィナは、ルシファーの手を取らなかった。

「その心に刻み込み、決して忘れるな。お前の優しさが、この俺を殺したのだ」

イルヴィナの唇が、いびつにつり上がった。

そして次の瞬間、イルヴィナは隠し持っていた短剣で、己が喉を一閃した。

斬り裂かれた喉から、勢いよく血が噴き出し、ルシファーの顔を叩いた。

嘲笑を浮かべながら、イルヴィナは後ろに倒れ、動かなくなった。「イル……ヴィナ……？」

ルシファーが、茫然と声をもらす。イルヴィナはすでに、事切れ

ていた。

顔を濡らす血に触れる。真っ赤だった。忌々しいまでに、赤い血……。
赤く染まった自分の指先と、イルヴィナの亡骸とを、見る。
周りの者は、言葉を失っていた。

「私は……」

耐え難い苦痛に顔を歪め、ルシファーは呟いた。

「私はまた、間違ってしまったのか……？」

ルシファーの問いに、誰も答えることができなかった。

セレネが、そっとルシファーへ寄り添った。

ルシファーはもう、何も言わず、悼むように、目を伏せていた。
灰色の空から、はらはらと、雪が降り始めた。

「陛下！ ルシファー陛下！」

ジェガンの、芯のある声が響く。

魔王宮は、先の戦いで壊れた場所などの修復を進めている最中だ。
その中を、戻って来た魔王を探し、ジェガンが走り回っている。

「どこにいらっしやるのですか、陛下！」

魔王宮の隅から隅まで走り回っているのだが、肝心の魔王の姿が
見つからない。

「陛下！」

ひとときわ、大きく叫ぶ。ジェガンの声が、辺りに木霊した。

返事は、帰ってこない。

弱り果て、ジェガンがため息をつく。

そこへ、

「騒がしいぞ、ジェガン。どうした」

ラウス公爵が、突然そこへ浮かび上がったように、現れた。

「ラウス様、陛下をご存じありませんか？ どうも、お姿が見えないのです」

「ルシファーなら、ここにはおらぬ。セレネもな。二人とも、先ほど、旅立った」

「旅立った……？ ど、どうして……」

「知らぬ。傷心を癒す旅ではないか」

「は、はぁ……」

「ともかく、奴が留守の間、おれが代理を務める。何か、用だったのか」

「あ、は、はい……」

ジェガンは、ラウスへ要件を伝えたと、その場を後にした。

残ったラウスは、深々とため息をつき、

「魔王の代理というのも、楽ではないな……」

呟くように言った。

「旅に出る、だと？」

ルシファーが口にした言葉を、ラウスが繰り返す。

「ああ。すぐにでも、出発しようと思っている」

「急だな。まだ、戻ったばかりではないか。お前が必要なのに、何故」

「申し訳無いとは思っているよ。けれど、もう少し彼女と世界を見て回りたいんだ」

「……セレネとか」

ああ、とルシファーが頷く。

「なるほど……。だがお前がいない間、こちらはどうする。魔王が不在なのは、まずいだらう」

「できれば、君に代理をお願いしたい。どうか、聞いてくれないか」

「おれにだと？」

「君しか、頼める人がいないんだ。頼むよ」

長年の親友にそう言われると、ラウスは、断ることができなかった。

「まあ、構わぬが……。どれほどで戻る」

「まだ分からない。しばらくは戻れないと思う」

「しばらく、とは？」

「しばらくは、しばらくさ」

ルシファーが微笑んだ。ラウスは訝しげに目を細めて、ルシファーを見ている。

「なあ、ラウス……」

「うん？」

「私はね、君こそが魔王に相応しいんじゃないか、と思っているんだ」

「……」

「君は苛烈さと、優しさを併せ持っている。きっといい魔王に……」

「ルシファー、おれは代理を務めるだけ。それ以上はごめんだぞ」

「……そうか。そうだな。すまない」

「やれやれ、とラウスは肩を竦め、

「しばらく、預かっていればいいのだな？」

「恩に着るよ」

深くため息をついてから、ラウスはマントの影から、何かを取り出し、ルシファーへ放った。それは、かつてルシファーが身につけていた、あの道化の仮面だった。

「ペルソナならば、たとえ旅先で魔族と遇おうとも、怪しまれまい」
「ありがとう、ラウス」

「構わぬさ。体に気をつけて、セレネを大切にやってくれ。

幸運を祈る」

「幸運を、親友よ」

そう言って、固い握手を交わし、ルシファーは　いや、ペルソナは、セレネと共に旅立っていった。

万が一のことを考えて、彼らを監視することもラウスにはできなかったが、それは野暮というものだろう。

「しばらくは、戻れぬ、か……」

そのしばらくが、ちょっとやそつとの期間でないことは、容易に想像がつく。

「まあ、いいさ、親友よ。精々、幸せにな」

今頃は、セレネと共にどこぞを歩いて進んでいるであろう親友に、ラウスは呟いた。

浅く雪の積もる丘を、二人は並んで歩いていた。

曇った空からは、はらはりはらりと、白いものが落ちてきている。

彼と手をつないで、歩けることが、セレネは嬉しかった。

「君と、世界を見て回りたい」

そう言われた時には、嬉しさで胸がはじけそうになったほどだ。

「さて、どこへ行くこうか、セレネ」

いつもの優しい声で、そう訊いてくる。

「どうしましょう……」

少し考えてから、

「わたし、また海が見たいです。どこまでも広がる、綺麗な海を……」

「海か……。いいね。少し寒いかもしれないけれど、秋から冬にかけての海は、春、夏のそれとは、また違う顔を見せてくれるかもしれないしね」

彼は、柔らかく微笑んだ。

その声も、微笑みも、手のひらも、彼の全てが、セレネは愛おしい。

「雪が、とても綺麗だ。もう少しだけ、歩いてみようか」

「そうですね」

セレネも、ふわりと微笑み返す。

「……さあ、行こう」

「はい、ペルソナさん」

そう言つて、また、ゆっくりと歩き出す。

繋いだ手を離さないように、二人は、そつと手に力を込めた。

『魔王(Lucifer)』 了

悠久交響詩篇ペルソナ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0827u/>

悠久交響詩篇ペルソナ

2011年7月26日03時20分発行